

吉備系上師質土器碗である。36・37には、外面に指揮えの痕跡がある。38の底部は、高台が高く、断面はにぶい三角形を呈しているので、形状から13世紀初頭のものと思われる。39～41は土師質土器の杯、42～46は、土師質土器の皿である。47は、瓦質土器の火鉢である。48～50は、備前系須恵質土器である。48は椀の口縁部で、端部に重ね焼きの痕跡が見られる。49は壺の口縁部で、端部上面には狭い水平部を有し、丸みをもたせている。外面にロクロ日が見られる。これらは、間壁編年備前II期のものと思われる。

排水施設が検出された08トレンチ周辺の状況をあわせて説明しておく。

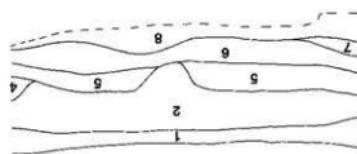
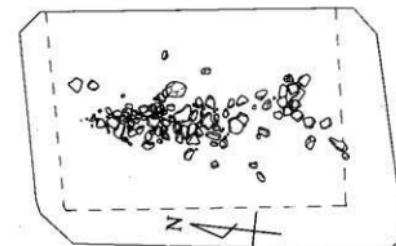
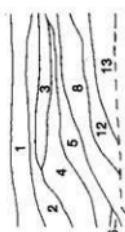
07トレンチの瓦だまりは、礫を多く含んで非常に硬く締まり、その上面が粘土で覆われていた(第32図)。また、09トレンチの瓦だまりは、約50cmの幅で南北方向に列状をなして統くものと思われた(第33図)。これらは、排水施設と何らかの関わりがあると考えられるが、その関係を特定することはできなかった。

第34図の51～53は09トレンチ、54・55は06トレンチから出土したものである。排水施設周辺のトレンチからは、07トレンチを含めてこれらの備前系須恵質土器や備前焼のほかに、瓦質・土師質土器の鍋・釜・桶・皿や古墳時代の須恵器、漸層焼などが出土している。

16.00m

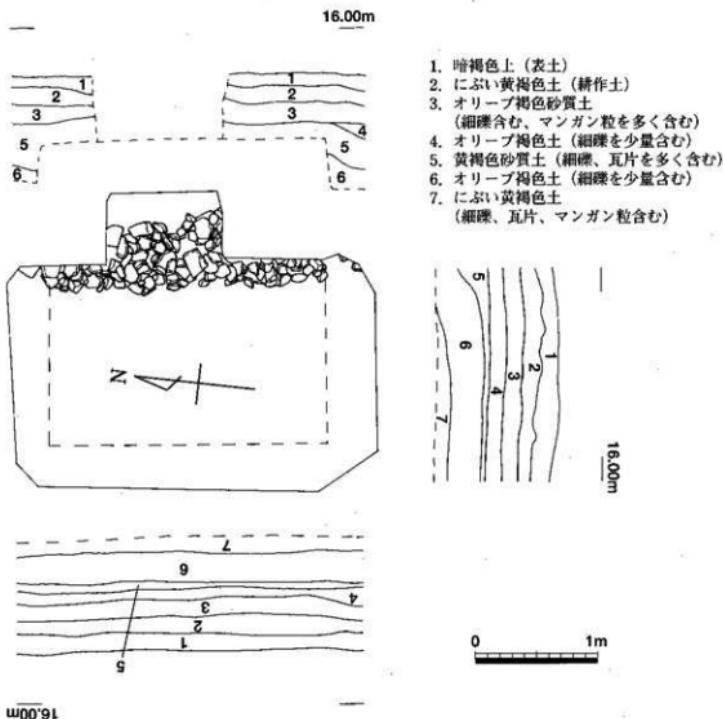
1. 増雨色土。(表土)
2. 黄褐色土(耕作土)
3. 明雨色土
4. にぶい黄褐色土(緑鐵含む)
5. 灰黃褐色土(緑鐵含む)
6. 黄褐色土(緑鐵を多く含む)
7. にぶい黄褐色土(泥物含む)
8. 灰黃褐色土質土(緑鐵、泥物を含む)
9. オリーブ灰褐色土
10. 黒色土(炭、遺物を多量に含む)
11. 灰黃褐色土(緑鐵を多く含む)
12. 黑褐色土上(緑鐵、遺物を含む)
13. 黄褐色土

16.00m

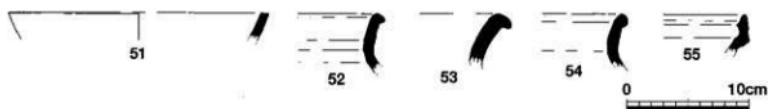


16.00m

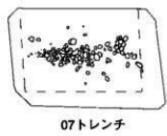
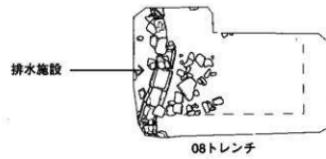
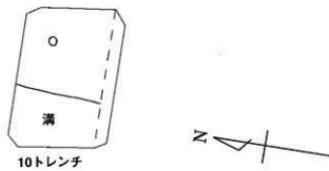
第32図 07トレンチ (1/40)



第33図 09トレンチ (1/40)



第34図 排水施設周辺出土遺物 (1/4) (51~53: 09トレンチ, 54・55: 06トレンチ)



0 1m 2m

第35図 排水施設周辺造構配置図 (1/80)

(7) 土器窯（第28・36図）

土器窯は、礎石建物の南西に隣接して2基検出された。両窯の平面検出時は、両窯の焚口付近を中心とし、ほぼ窯の全面を土師質土器片や炭が多く含む土で覆われていた。平面検出をした後に、それぞれの窯を主軸に沿って断ち割り、ともに北東側を掘り下げた。東側の穴窯をS O - 3、西側のダルマ窯をS O - 4とした。

穴窯（S O - 3）は、幅約1.3m、把握できた全長は約3.3mで、山側（南東）に延びると思われるが、後世の削半により破壊されていた。主軸方向は東西で、東西から約30°南に振り、北西に開口している。窯壁は、焼成部が灰色硬化しているが、焚口部と思われる所はあまり焼けておらず、焼成部との境は被熱により赤化している。焚口部から焼成部へは傾斜して緩やかに立ち上がり、床は舟底形を呈している。

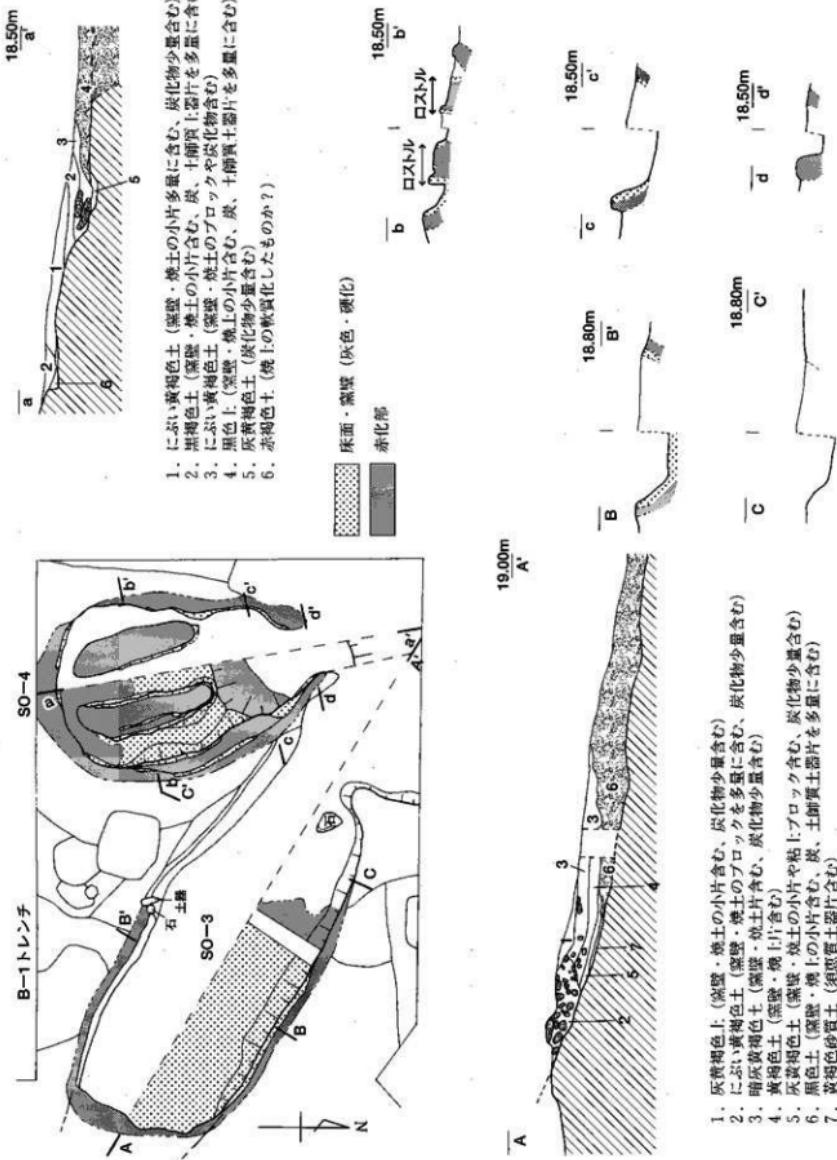
窯体内の埋土は、炭や窯壁片を含み、備前系須恵質土器や瓦質・土師質土器が出土した。下層になるにしたがって備前系須恵質土器の量が多くなり、中・下層からは焼き過ぎて硬質化した鍋の破片も出土している。上層については、隣接するダルマ窯の灰原の遺物と思われる、瓦質・土師質土器片が多く出土している。56~68が上層、69~74が中層、75~80が下層から出土したものである（第37図）。

56・57は、畿内系瓦質・土師質土器鍋の口縁部で、段をもって形成されている。58は、吉備系土師質土器碗の底部で、高台は高く、断面はにぶい三角形を呈している。59は、畿内系土師質土器鉢の口縁部である。61は瓦質土器の高台付皿で、仏具の一形態と思われる。「ハ」字状の高台で、外面の調整は丁寧である。62は備前系須恵質土器皿の底部で、回転糸切り痕跡があり、焼成はややあまい。63は備前系須恵質土器壺、64~66は備前系須恵質土器鉢で、間壁編年備前Ⅱ期のものと思われる。69・70は畿内系瓦質・土師質土器鍋の口縁部であり、段をもって形成されている。70は、須恵質のように非常に焼きが良く、失敗作ではないかと考えられる。71は備前系須恵質土器碗の口縁部で、端部に重ね焼きの痕跡があり、焼成はややあまい。72は備前系須恵質土器碗の口縁部であるが、71に比べて砂粒を多く含み、焼きは良い。73は、備前系須恵質土器鉢の底部である。75は備前系須恵質土器碗で、72と同様に砂粒を多く含み、焼きは良い。76・77は備前系須恵質土器鉢であり、78~80は備前系須恵質土器壺である。

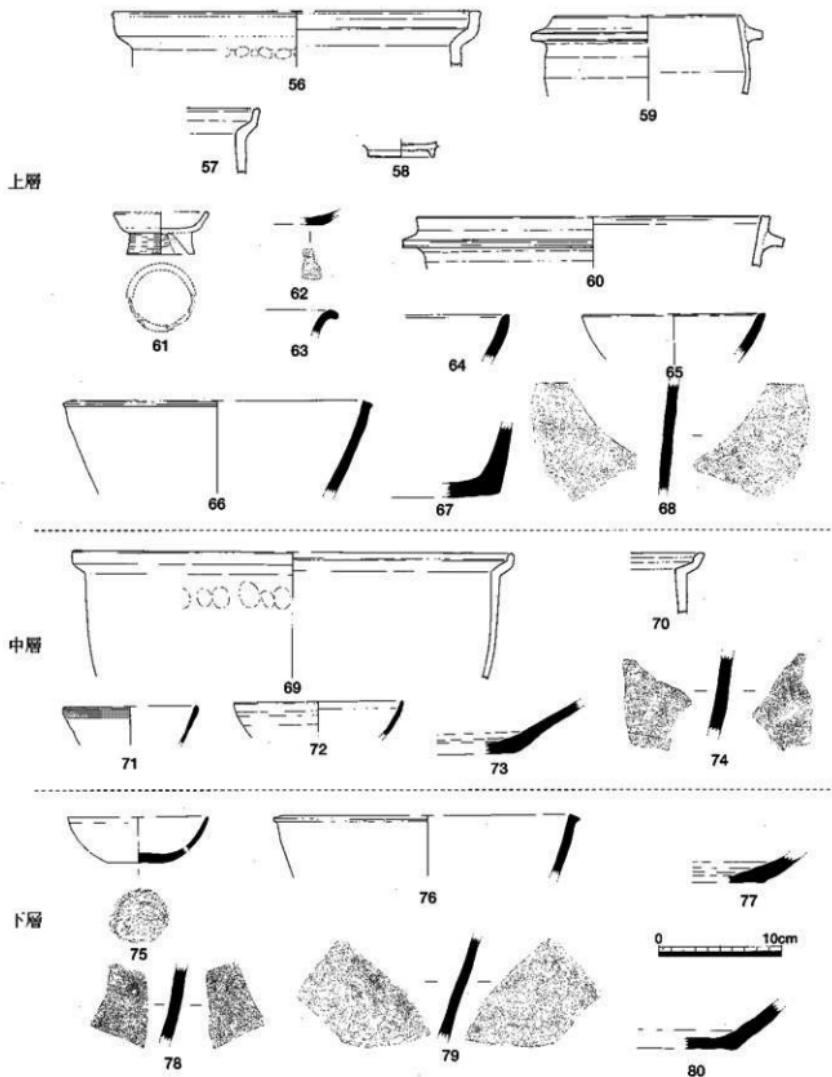
瓦質・土師質土器は、鍋や釜が多く、杯・皿なども出土している。ほとんどのものが畿内系の形態である（註2）。また、上層から高台のしっかりした吉備系土師質土器碗が出土しているが、これは搬入品が紛れ込んだものと思われる（註3）。

備前系須恵質土器は、鉢、甕、皿、碗、壺、壺とほぼ器種は揃っているが、鉢、甕、皿（碗）の破片が多い。碗・皿は焼きが非常にあまいものが多いが、中には砂粒を多く含んで焼きの良いものもある。これらの須恵質土器片は、全体的に間壁編年備前Ⅱ期に類似したものが多いようである。これらのことから、この窯では、備前Ⅱ期に類似した備前系須恵質土器を焼成したものと思われる。また、隣接する窯の灰原からの混入とも考えられなくもないが、鍋などの失敗作も多数出土していることから、瓦質・土師質土器の形態のものも焼成していた可能性が考えられる。

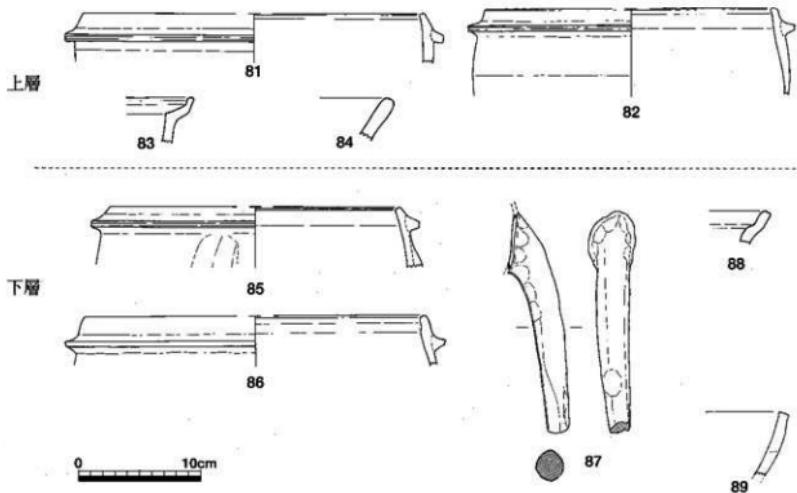
ダルマ窯（S O - 4）は、幅約1.5m、長さ約2.4m、焚口幅約0.3mの楕円形で、主軸方向はほぼ南北方向である。窯壁は、被熱して赤化しているが、一部の焼成室分焰牀付近は灰色硬化している。焚口は、すばまつて北西に開口する。焚口部と焼成室との間に約20cmの段差があり、焼成部はほぼ平坦で2本の分焰牀を持つ。この窯は、分焰牀や壁面の状態から、一度改修されているようである。



第36図 SO-3、4 (1/40)



第37図 SO-3出土遺物 (1/4)



第38図 SO-4出土遺物 (1/4)

また、隣接した穴窓を意識して主軸をずらして造られていることから、穴窓との同時操業も考えられる。

窯体内的埋土は、赤色焼土のブロックや炭を多く含み、瓦質・土師質土器片が出土した。器種は、鍋や釜がほとんどであるが、鉢や皿も出土している。ほとんどが畿内系のものである。ほかに、高台の低い吉備系土師質土器碗（小破片のため未図示）や、備前系須恵質土器片も数点出土している。81～84が上層、85～89が下層から出土したものである（第38図）。

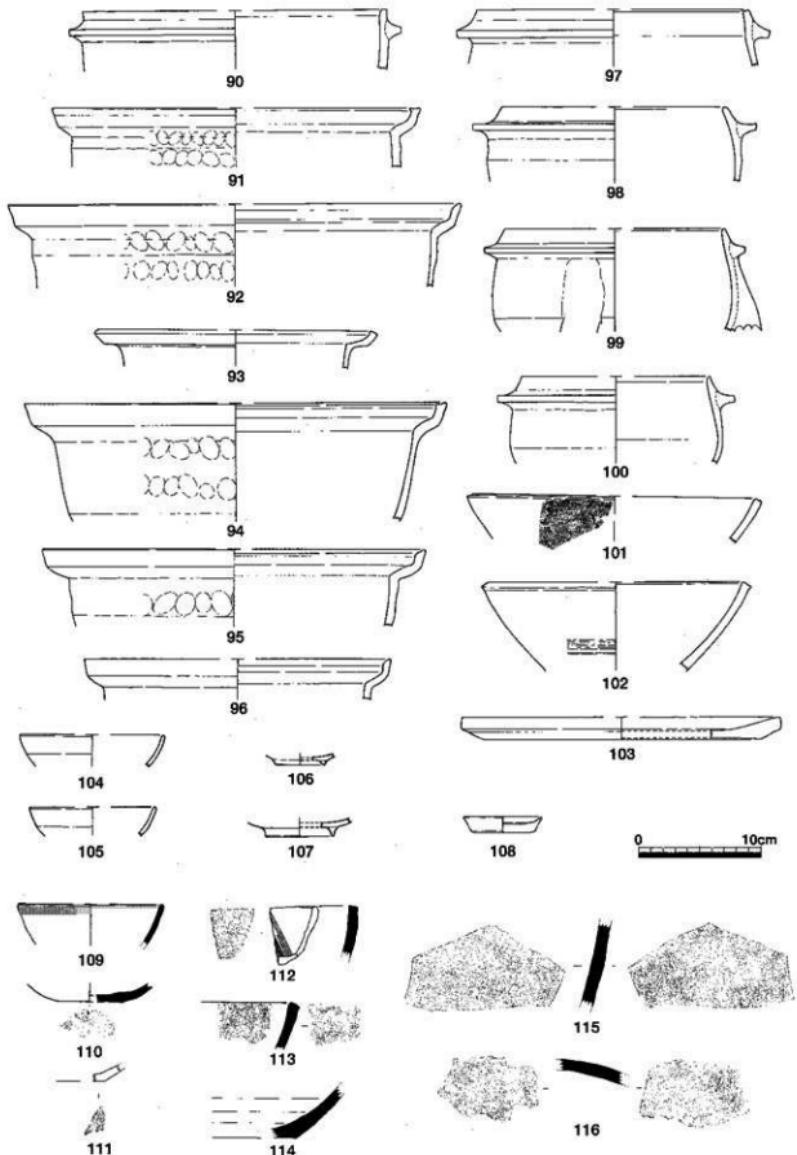
81・82は、畿内系土師質土器釜の口縁部である。83は畿内系瓦質土器の口縁部で、段をもって形成される。須恵質土器のように非常に焼きが良く、失敗作ではないかと考えられる。84は、瓦質土器鉢の口縁部と思われる。85・86は畿内系土師質土器釜の口縁部であり、85は鋤に接して脚部が付けられている。88は畿内系土師質土器鍋の口縁部で、段をもって形成される。89は、土師質土器鉢の口縁部である。

備前系須恵質土器は穴窓のもの、吉備系土師質土器碗は搬入品が紛れ込んだものと思われる。土師質土器皿については点数は少ないが、吉備系土師質土器碗や備前系須恵質土器より多く出土しており、焼成していたとも考えられなくもない。少なくともこの窯は、瓦質・土師質土器の鍋・釜を焼成した窯と考えられる。

なお、窯の覆屋に付随すると思われるピットも検出しているが、調査範囲が狭いことや平面検出のみにとどめていることから、その詳細は不明である。

灰原からも多数の遺物が出土している（第39図）。

90・97～100は畿内系の瓦質・土師質土器釜である。99は、鋤に接して脚部がつけられている。91



第39図 土器窯灰原出土遺物 (1/4)

-96は、鐵内系の瓦質・土師質土器鍋である。口縁部は段をもって形成され、外面には指押えの痕跡が見られるものが多い。101・102は、瓦質・土師質土器の鉢である。103は、土師質土器の焰絡である。104~107は、吉備系土師質土器碗である。106はやや低い高台で、断面はにぶい三角形を呈する。107は高台が高く、断面はにぶい三角形を呈する。108・111は土師質土器皿であり、111の底部は回転糸切り痕跡がある。109・110は備前系須恵質土器碗で、109の口縁端部には重ね焼きの痕跡があり、110の底部には回転糸切り痕跡がある。112は、備前系須恵質土器のすり鉢である。口線上端はほぼ平坦で、やや外側下方に傾斜する。内面には極細の櫛状工具によるカキメがあり、グイビが谷窓のものより古いと思われる（註4）。113・114は備前系須恵質土器の鉢で、間壁編年備前Ⅱ期のものと思われる。115・116は備前系須恵質土器甕の体部で、一部にハケメの痕跡が残る。

瓦質・土師質土器が圧倒的に多く、鍋や釜を主体とするが、鉢、皿（椀）も出土している。鐵内系のものがほとんどである。ほかに搬入品とみられる吉備系土師質土器碗もあり、高台の高いものから低いものまで出土している。また、備前系須恵質土器も瓦質・土師質土器ほどではないが、鉢、甕（壺）、椀（皿）などが多数出土している。この灰原は、隣接する掘立柱建物の遺構面の一部を覆っており、瓦列には切られている。

土器窯で焼成されたと思われる備前系須恵質土器、瓦質・土師質土器は、胎土に多くの砂粒を含んでいる。これは、万富産東大寺瓦の胎土と類似しており、同様の粘土を使って焼成されたものと考えられる。

(8) 挖立柱建物 (第28・41・43図)

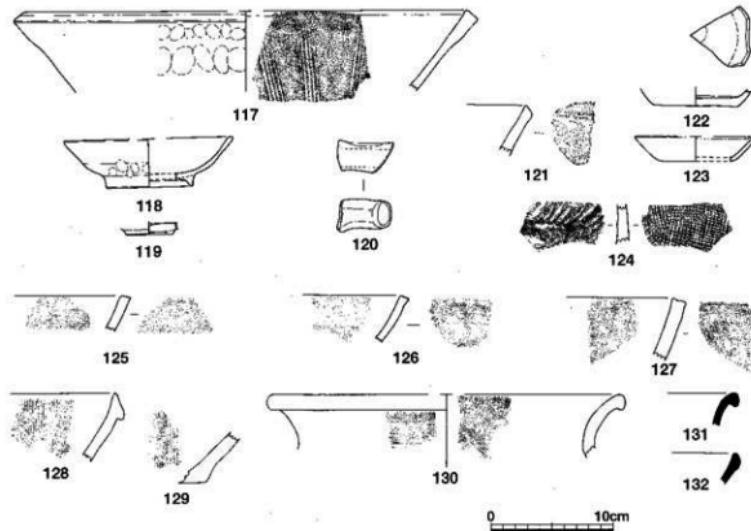
掘立柱建物は、平成14年度調査で礎石建物の規模を確認するために設定した、03、04トレントンにおいて検出された区画溝とピット群で構成される。

区画溝は、礎石建物の西側を壊して、ほぼ平行に掘られている。その北側では、ほぼ直角に西に曲がり、約5m西側に延びた所で瓦列に切られている。15トレントンの東側でも南北方向に溝が検出され、これらが同一の溝であるならば、東西方向約8m、南北方向約12mの長方形の区画溝となる。

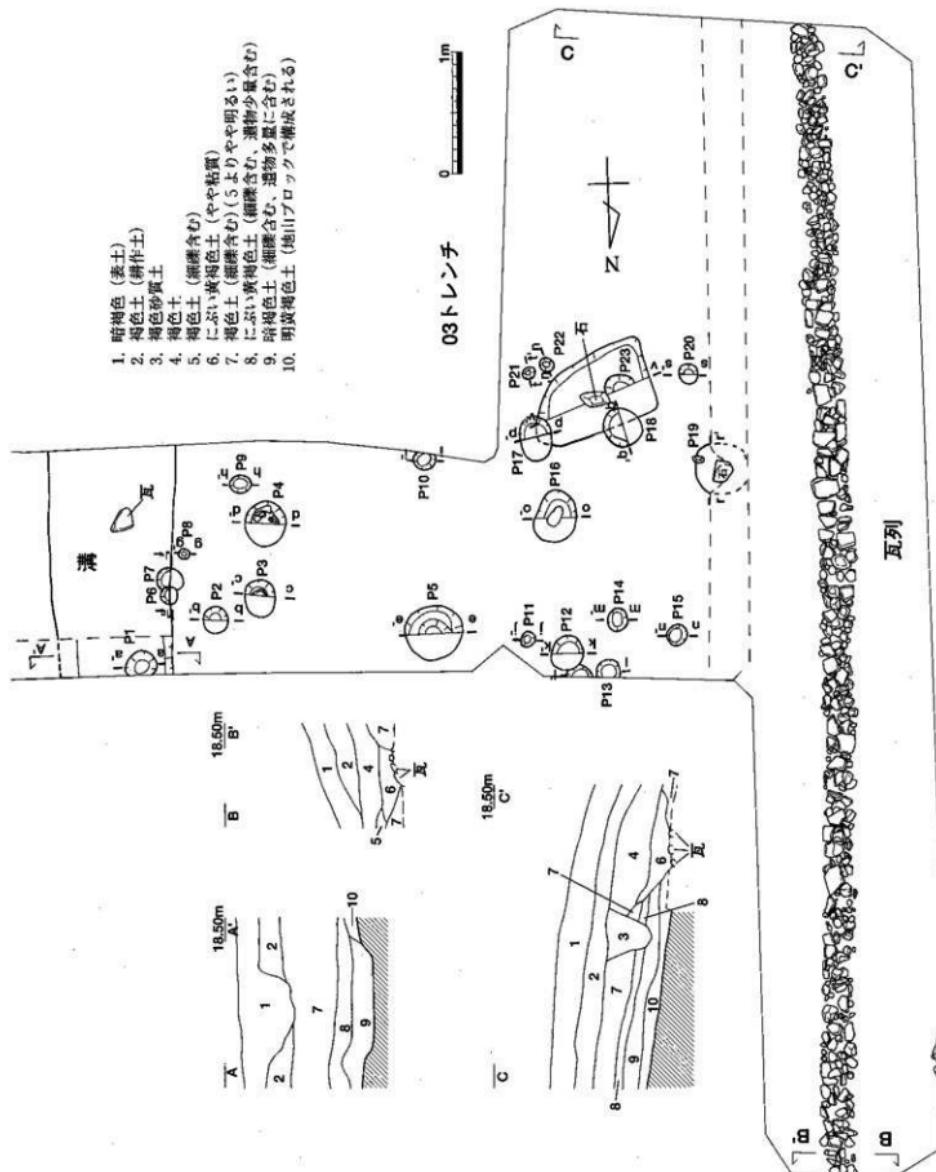
区画溝に取り用まれた中では、多数のピットと土器1基が検出された。ピットは、大きなものは半掘し、小さなものは全掘した。深さは、10cmほどの浅いものがほとんどであった。P3は、東大寺瓦片を礎盤として利用していた。P4は、土鍋などの土師質土器片で柱を固定していたようである。ピットの並びから何棟かの建物が重複していると思われるが、掘立柱建物の棟数や規模を特定することはできなかった。また、礎石建物に伴うピットも存在する可能性がある。

第40図は、区画溝やピットなどを検出するまでに出土した遺物の主なものである。ほかに瀬戸焼の破片も出土している。

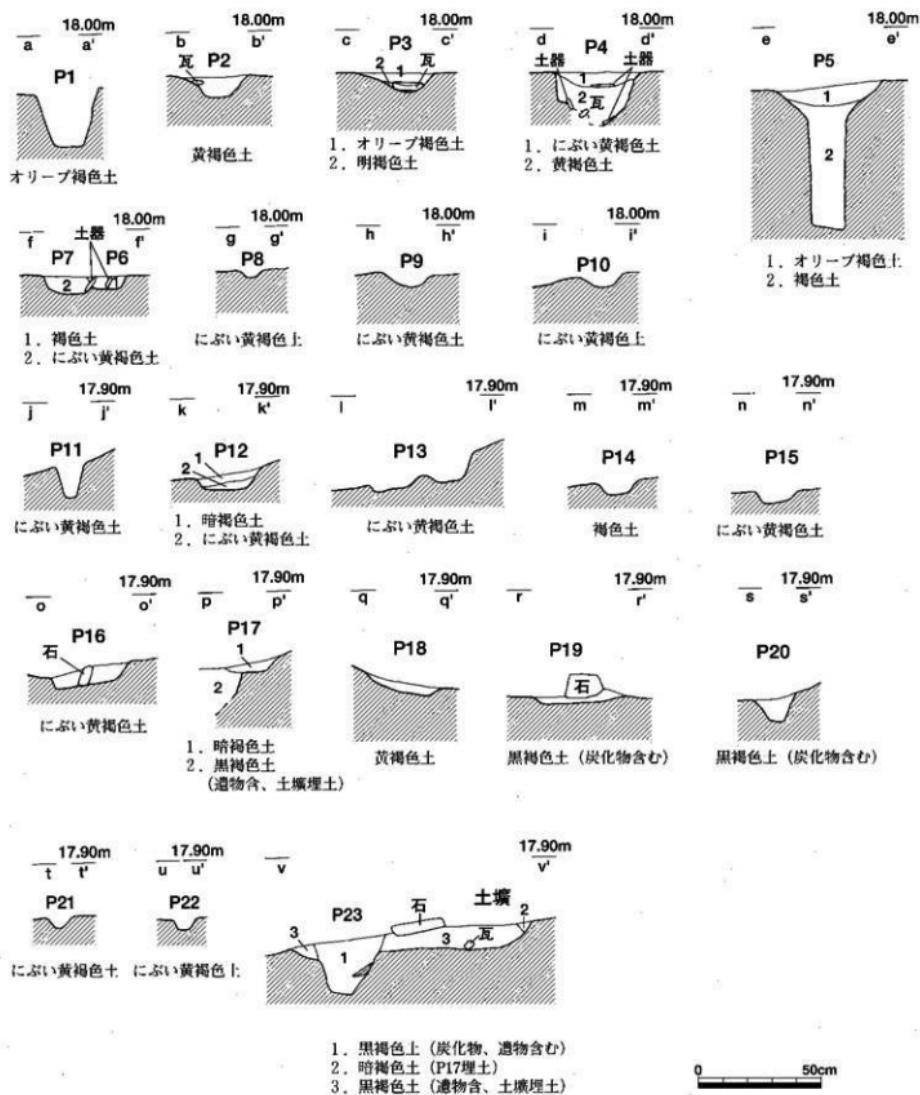
117は、瓦質土器のすり鉢である。内面に4条のカキメが施されている。118・119は、吉備系土師質土器碗である。118は高台が高く、断面はにぶい三角形を呈する。119は高台が低く、断面は台形を呈し、やや粗雑な形態である。120は、土師質土器の「行平」形鍋の把手である。121は土師質土器鉢の口縁部で、口縁上端に5条の沈線、内面にハケメの痕跡がある。122・123は、口禿の白磁皿である。13世紀中葉から14世紀前半のものと思われる。124は古墳時代の須恵器壺の体部である。外面上に格子目叩き、内面に当て具の痕跡が見られる。125～127は備前系須恵質土器鉢、130は備前系須



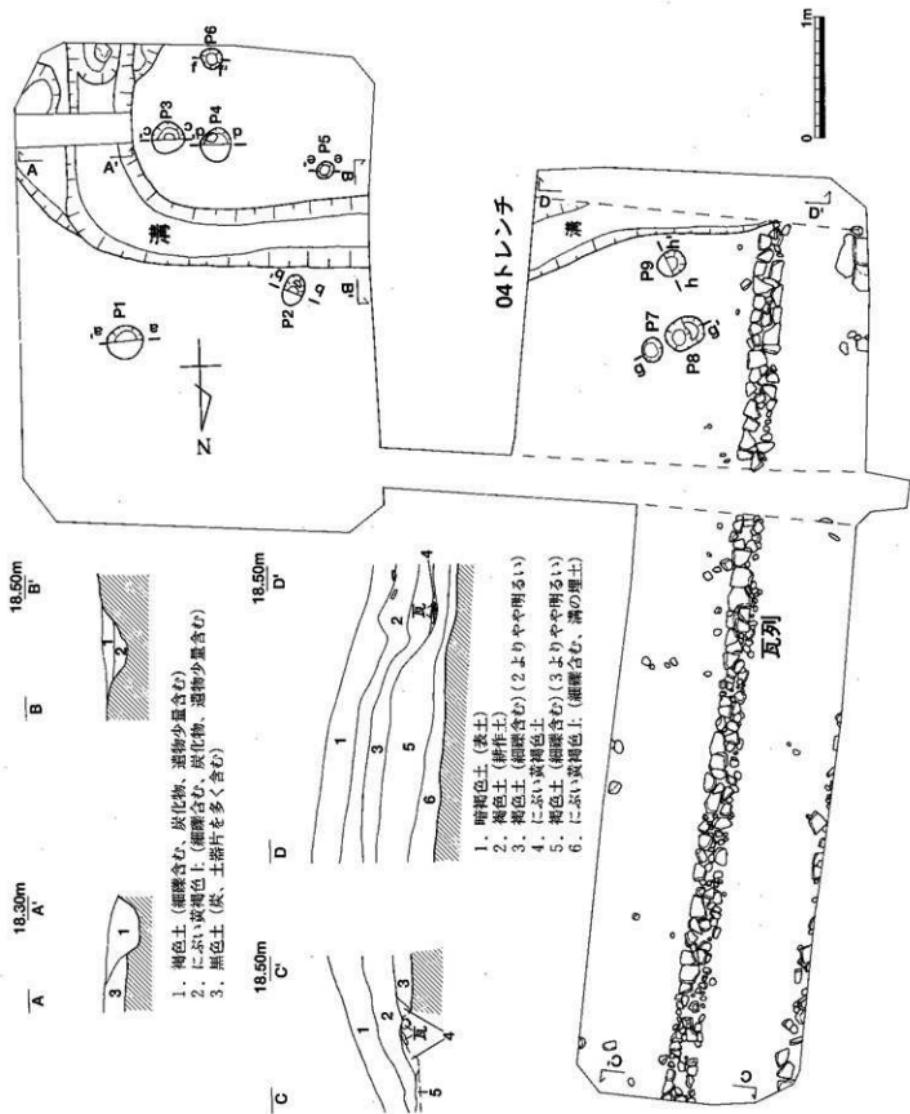
第40図 挖立柱建物検出03・04トレントン出土遺物 (1/4)



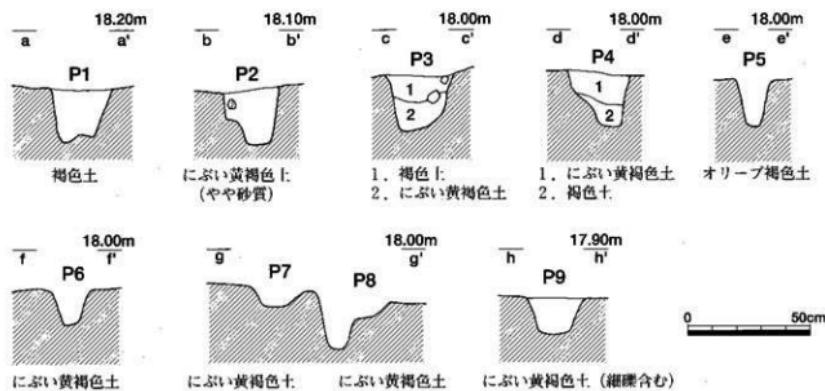
第41図 03トレンチ遺構配置図 (1/40)



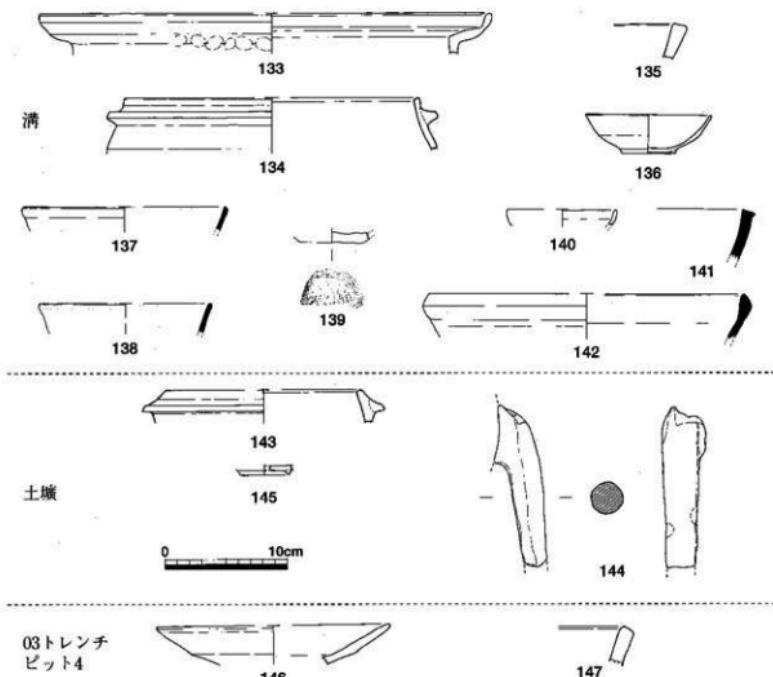
第42図 03トレントピット (1/20)



第43図 04トレンチ造構配置図 (1/40)



第44図 04トレントピット (1/20)



第45図 溝・土壤・ピット出土遺物 (1/4)

恵質土器窯の口縁部である。間壁編年備前II期のものと思われる。128・129は備前焼のすり鉢、131は備前焼甕である。132は、東播系須恵質土器鉢の口縁部である。

IV西溝内から、高台の低い吉備系土師質土器碗（第45図136）が出土し、ピット検出面からも13～14世紀代の白磁片（第40図122・123）が出上している。北東部の溝の屈曲部では溝（SD-1）を切っているが、03トレンチでは掘立柱建物の遺構面上層で十師質土器片を多量に含む炭層（土器窯S0-3・4）の灰原に付随すると考えている土層があり、時期の特定が難しい。この区画溝は、少なくとも14世紀代には埋没したものと考えられる。

（9）瓦列（第28・41・43図）

瓦列は、03、04トレンチの西側で検出された。規模を確定するために調査トレンチを南北方向に拡張したが、約20m確認ただけで、さらに南北方向に続いている。今後の調査で、規模を確定する必要がある。この瓦列は、先に述べた掘立柱建物を区画する溝を切っており、それより新しいことがわかる。また、この溝と重なる付近で、東方向の山側にやや曲がっている。瓦列は、10cm前後の大きさの「東大寺瓦」片と小礫を用いて幅約30cm、厚さ約5cmに敷き並べている。当初は、建物の地覆石として利用されたものと考えたが、瓦列内に礎石もなく、長さが20m以上になることから、何らかの区画のために構築されたものと思われる。また、暗渠や雨落ち溝とも考えられるが、断面の観察結果からは、そのようには思われなかった。

瓦列を検出した面からは、瓦質・土師質土器、備前系須恵質土器、備前焼、青磁などが出土している（第46図）。

148・149は、備前系須恵質土器の碗と甕の破片である。150は備前焼甕の口縁部で、玉縁を呈し、間壁編年備前III期のものと思われる。151は青磁雷文帶碗の口縁部で、15世紀代のものと思われる。

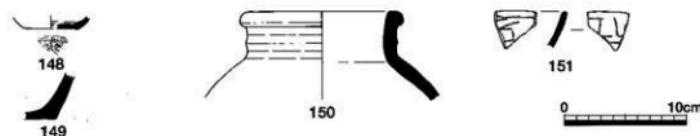
瓦列の時期の特定は難しいが、14世紀前半には遡らず、15世紀代までのものと考えられる。

（10）その他の遺構

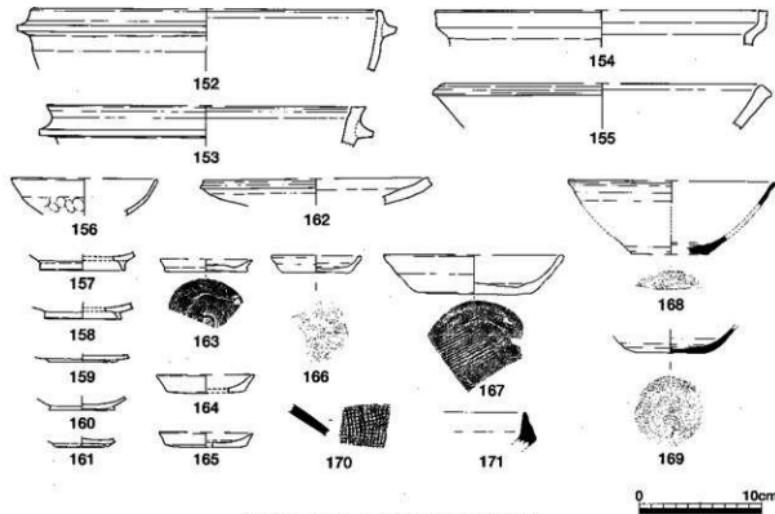
10トレンチは、深さ約2mまで掘り下げ、東側にピット1個、西側に溝1条が検出された。溝内には炭を多く含む黑色土が堆積し、多量の瓦質・土師質土器片が含まれていた。

152～154は、畿内系瓦質土器の釜・鍋である。155・162は、瓦質土器の鉢である。156～161は吉備系土師質土器碗であり、高台の高いものから低いものまで出土している。163～166は土師質土器皿で、163には回転ヘラ切り痕跡、166には回転糸切り痕跡がある。167は土師質土器杯で、底部を回転ヘラ切りしたのちに、板目痕跡が付着している。168・169は備前系須恵質土器碗で、いずれも底部に回転糸切り痕跡がある。170は古墳時代の須恵器蓋、171は備前焼のすり鉢である。

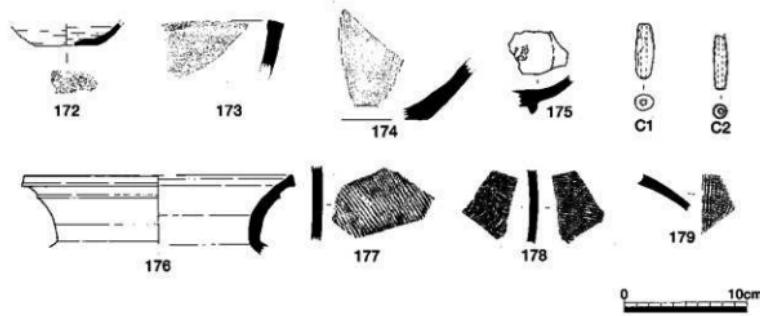
瓦質・土師質土器の器種には、鍋や釜などが多く、土器窯（S0-3・4）の灰原や礎石建物の北側を切っている溝（SD-1）から出土した、瓦質・土師質土器と同様のものであった。ほかに白磁や瀬戸焼が出土している。



第46図 瓦列出土遺物 (1/4)



第47図 10トレンチ溝出土遺物 (1/4)



第48図 B区その他の出土遺物 (1/4)

註

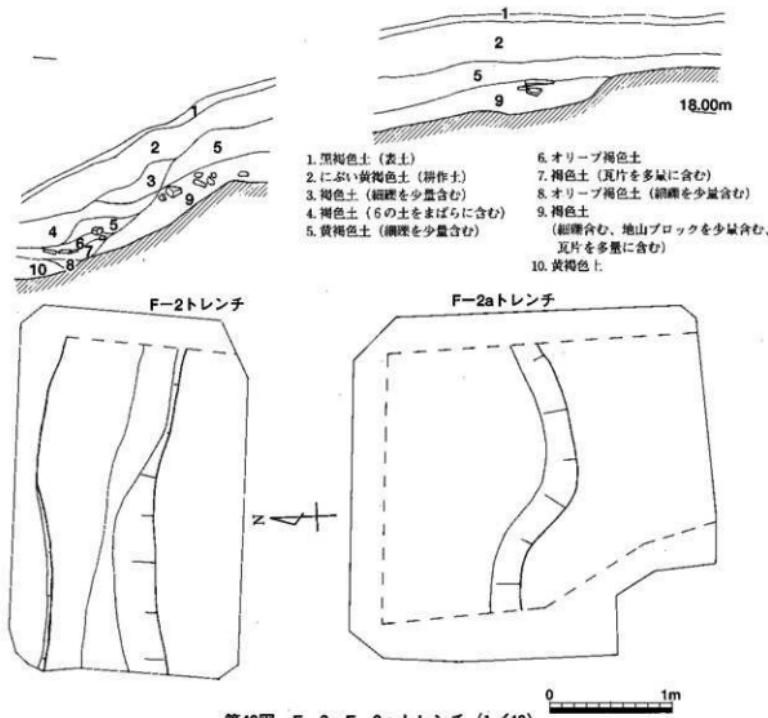
- 1 今回の調査で出土している鍋や釜は、瓦質であるものと土師質であるものがあるが、畿内系の鍋や釜は、本来は瓦質土器として生産したものと思われ、少なくとも畿内系の三足付釜については、瓦質土器であると、鈴木康之氏にご教示いただいた。
- 2 榎田正耕氏、伊藤晃氏のご指摘による。
- 3 骨土分析により古備系土師質土器類は、複数の所から持ち込まれたものと推定される。白石純氏のご指摘による。
- 4 伊藤晃氏のご指摘による。

第3節 F区の調査

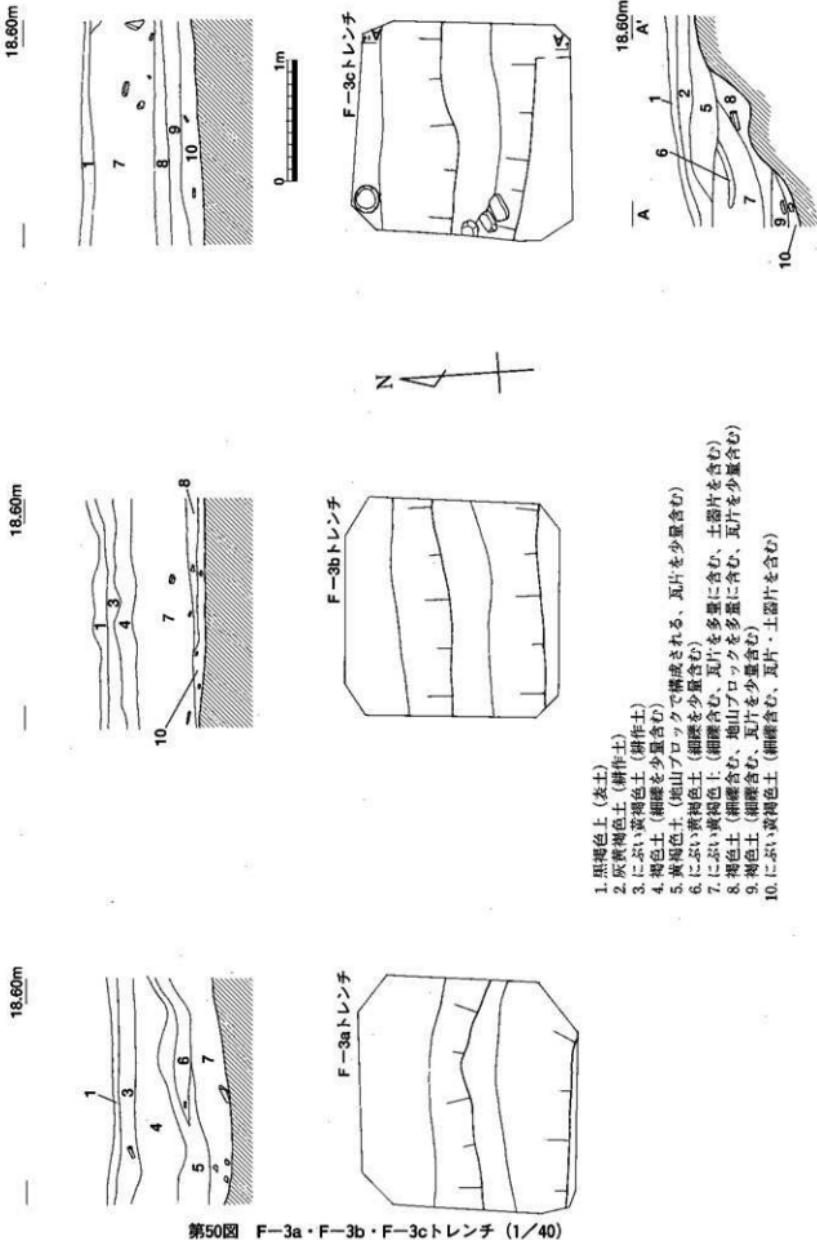
F区は、上の山地区北部に位置する。太田住宅地造成時に多くの「東大寺瓦」が出土しており、軒瓦片も採集されていることから、東大寺瓦窯が存在する可能性が大きい。また、「楠田権平本」にある南窯と推定される場所でもある（第6章参照）。しかし、科学探査の結果は思わしくなく（註1）、発掘調査でもそれを裏付けるように、窯などの遺構は検出されなかった。ただ、公園に隣接した北端部では、「東大寺瓦」片が多く出土している。

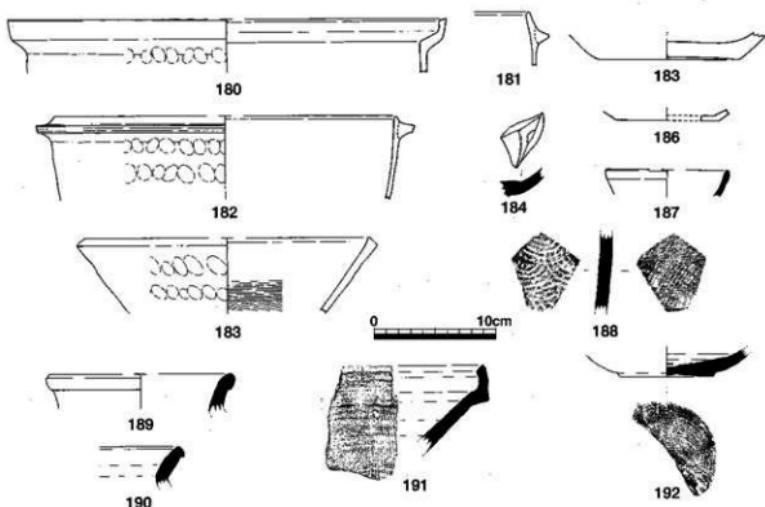
F区は、平成13・14年度調査で大小18本のトレンチを設定して調査した。トレンチ番号の頭には、いずれもFのアルファベットがつく。ここは、開発計画が浮上している場所であるため、窯の有無を確認する必要があった。「東大寺瓦」片が多数出土したのは、F-2、2a、3a、3b、3cトレンチである。

F-2トレンチは、表土中から多くの「東大寺瓦」片が出土したが、特に最下層では折り重なるように瓦が堆積し、窯壁片も数点出土した。この出土状況は、製品にならない瓦を廃棄したように思



第49図 F-2・F-2aトレンチ (1/40)





第51図 F区出土遺物(1/4)

われた。このため、窯の有無を確認しようと1m南にF-2aトレンチを設定したが、多数の瓦が出土するのみで、窯体を発見することはできなかった。

F-3a、3b、3cの各トレンチは、中間層で多量の瓦が出土したが、炭をあまり含んでいないため、2次堆積したものと思われる。各トレンチ内には、東西方向に走る犬走りのようなものが検出されたが、よくわからない。この調査によって、F-3トレンチの山側上段に窯があると考えられたため、F-4トレンチを設定して調査した。しかし、遺構や遺物は何も確認されなかった。

また、F-1トレンチから西側の調査では、これまでの土質と様子が違い、遺構は何も確認されず、出土した遺物も少量であった。

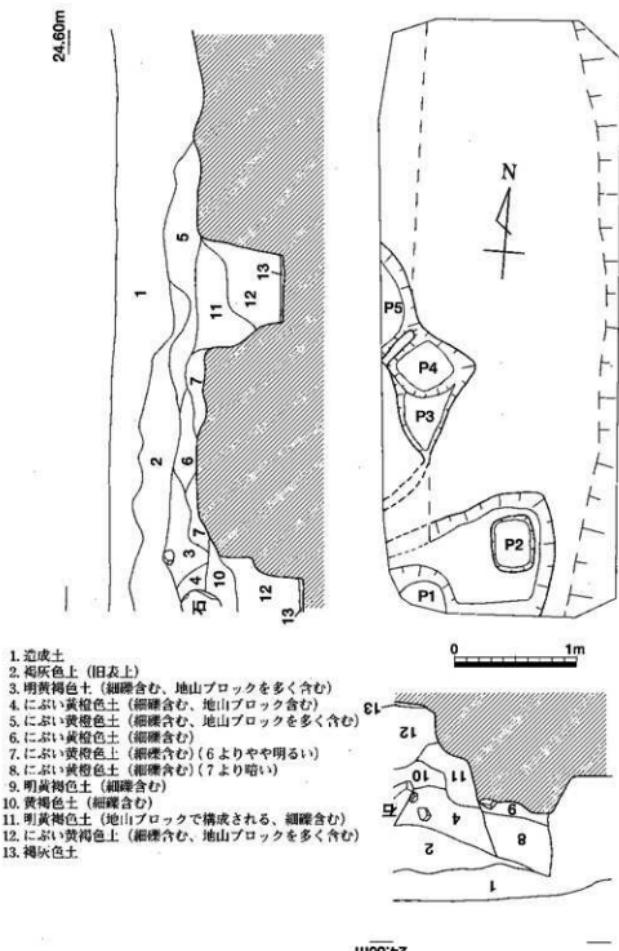
多量の「東大寺瓦」が出土した上の山地区北端部は、瓦窯が存在していたと考えられるが、太田住宅造成時に破壊された可能性がある。ただし、今回の調査のトレンチは範囲が狭く、遺構を検出できなかったとも考えられ、上の山地区北端は慎重に対処していくなければならない場所である。

瓦以外の遺物については、瓦質・土師質土器の鍋・釜、須恵質土器や備前焼などが出している。瓦質・土師質土器の鍋・釜は、大寺山地区から出土のものと形態が類似している(180~183、185)。須恵質土器は、間壁編年備前Ⅱ期に類するものや束口系鉢の破片も見られた。備前焼は、間壁編年Ⅲ~V期のものがあった。また、龍泉窯の青磁碗(184)、瀬戸焼(187)、古墳時代の須恵器(188)も出土している。

註1 今回の科学探査では、窯体の存在を特定できなかった(第3章参照)。平成8年に実施した北端部の探査では、窯体と考えられる磁気異常が4か所で確認されている。しかし、探査場所を明確に示す資料が町教育委員会には残されていなかった。略図から推定して、平成13年度にトレンチ(F-2、3)を設定したが、窯は検出されなかった。今後、範囲を拡大して調査する必要があると考えられる。

第4節 C区の調査

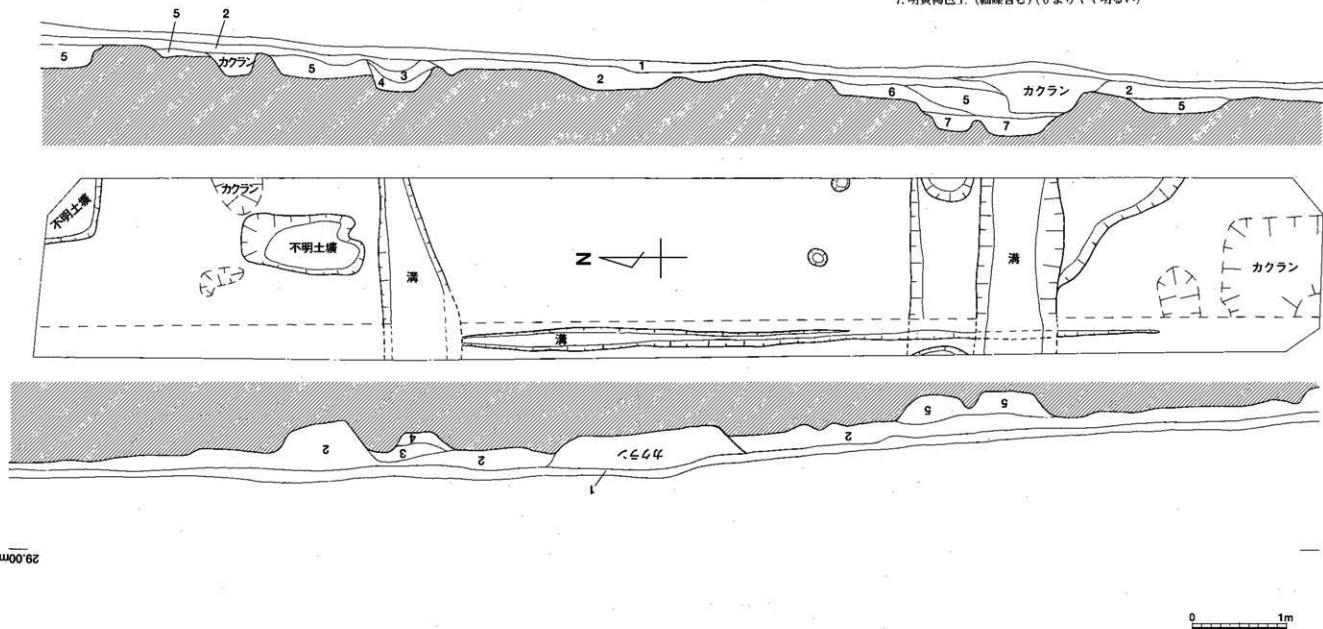
C区は、平成13年度に5本のトレンチを設定して調査した。トレント番号の頭には、いずれもCのアルファベットがつく。現地には桃が植えられており、植樹に伴う搅乱が目立ったところである。科学探査で指摘のあった土壤は、深い搅乱であった。



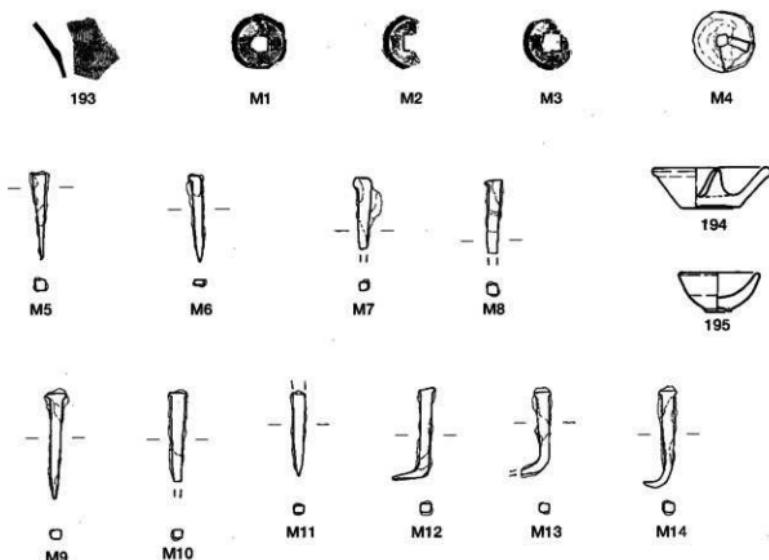
第52図 C-1aトレント(1/40)

1. 黒褐色土（表土）
2. 黄褐色土（耕作土）
3. 明黄褐色土（地山ブロックで構成される、腐葉土含む）
4. 暗灰色土（地山ブロック、腐葉土含む）
5. にぶい黄褐色土（細礫含む）
6. 明黄褐色土（細礫含む）
7. 明黄褐色土（細礫含む）（6よりやや明るい）

29.00m



第53図 C-4トレンチ (1/40)



第54図 C区出土遺物 (1/2, 193:1/4)

この調査区は、「大寺山」頂部平坦面にあたり、東大寺瓦窯操業時の施設があるものと想定された。しかし、C-1aトレンチとC-4トレンチからは、近世の遺構や時期不明のものが検出されたにとどまった。

C-1aトレンチは、近年に造られた備前焼窯南側に隣接する。この窯を構築する際に造成されており、造成時には何も出土しなかったと聞いている。

このトレンチでは、ピットが5個検出された。ピットはいずれも隅丸方形で、P3とP4の切り合いはP3が古い。P1は炭化物を多く含み、図示したM5を含む釘2点が出土した。P2は上部での直径が36cmで、中心に1辺12cmの隅丸方形の痕跡があった。痕跡内からは、図示したM6～M8を含む釘7点、銅鏡の寛永通寶（M1～M3）と鉄錢2点（内1点はM4）が出土した。P4からは、完形の土器2点（194、195）と、図示したM9～M14を含む釘十数点が出土した。194は灯明皿で、195はミニチュア品の台付小碗である。釘は長さが約3.5～5.0cmで、頭部形状が折り曲がったものや潰れて「T」字状になっているものがあり、中には先がカスガイ状に折れ曲がっているものもあった。断面はいずれも方形である。この遺構は、釘で止められた木製の箱に、火葬骨を納めたものと考えられる。

C-4トレンチは、東西方向に2条の幅約40cmの溝、南北方向に1条の幅約10cmの溝がそれぞれ走り、ピット数個や土壤が検出された。ただし、遺物はほとんどなく、これらの遺構の時期は不明である。

なお、C-2トレンチから東大寺瓦（平瓦）が2点出土している。

第5節 D区の調査

D区は、平成14年度に調査した区間である。調査トレンチは、01、02、11、12、13、14、16、17、18、19の10本である。いずれも遺構は検出されず、遺物も少量出土したのみであった。この周辺は谷部にあたり、水が湧き出てくることから、多くのトレンチが地山面まで検出できずに途中で断念した。また、水が比較的少ないとこでは、2m以上掘削しても地山面に到達しないため、調査途中で断念している。このようなことから、この区域は、中世以後に谷であった所が造成されたと考えられる。現在は畠として利用されているが、近代の暗渠があることから、かつては水田として利用されていたようである。調査中には、旧水田面やその床上と思われる堆積土を確認した。

遺物は、土師質土器の釜・鍋の破片、古墳時代や古代の須恵器、197などの備前系須恵質土器、198などの備前焼などが出土している。



第55図 D区出土遺物 (1/4)

第6節 E区の調査

E区は、大寺山地区南端部に位置し、県報告のA区の窯の南側にあたる。調査トレンチは、20トレンチのみである。多くの東大寺瓦片を利用した、近代の暗渠が検出されただけであった。ただ、「戦後に土地の持ち主が、瓦を窯詰めしている状態の窯を発見して、瓦の完形品を取り出した」「山側斜面に瓦がたくさん見えていた」という伝聞がある場所でもある。昭和54年の窯が多数確認された県調査地の南側に位置することから、以後さらなる調査をする必要がある場所である。

第7節 瓦

今回の調査で出土した「東大寺瓦」については、造構別に列記するべきであるが、発見された瓦窯が1基で焚口部のみであり、瓦窯に隣接した瓦だまりの遺物も、多くをB-2トレンチ包含層遺物として取り上げている。また、造構に伴って出土した瓦には、軒瓦などはないため、本報告では特徴的で残りのよい「東大寺瓦」を、まとめて報告することにした。

今回の調査で、瓦はコンテナ約85箱分出土している。平瓦や丸瓦がほとんどであるが、軒瓦や塙、引掛け瓦などの特殊な瓦も出土している。また、多数の「東大寺」刻印瓦が発見された。瓦の胎土中には、砂粒を多く含んでおり、このことが万富産瓦の特徴の一つと思われる。

1. 軒瓦

軒瓦は、岡山県調査報告書（註1：以下、県報告という。）では1点も出土していないが、これまで所蔵されている軒瓦について調査し、軒丸瓦を2類6種（1類4種、2類2種）に分けている。その後、山崎信二氏が岡山県内出土瓦と東大寺の所用瓦とを比較検討している（註2）。軒丸瓦は1類7種、2類2種、軒平瓦は3種を確認し、さらに軒丸瓦と軒平瓦の文字を囲む個々の円が半球状に盛り上がっている点に着目して、半らなものⅠ群、半球状に盛り上がるものをⅡ群とし、Ⅰ群、Ⅱ群に分けている。また、芦田淳一氏は、軒平瓦について3型式11種類ほど確認し、技法について細かく検討している（註3）。

軒丸瓦の文様は、中央に円環をめぐらせた梵字を置き、その外側に「東大寺大仏殿」の銘文を1字ずつ円環に入れて配し、その外側に蓮華文と珠文を巡らしている。軒丸瓦の1類は、花弁端が尖り隣の花弁と重なり合うもの、2類は花弁端が反転した形で凹み、隣の花弁と接触しないものである。

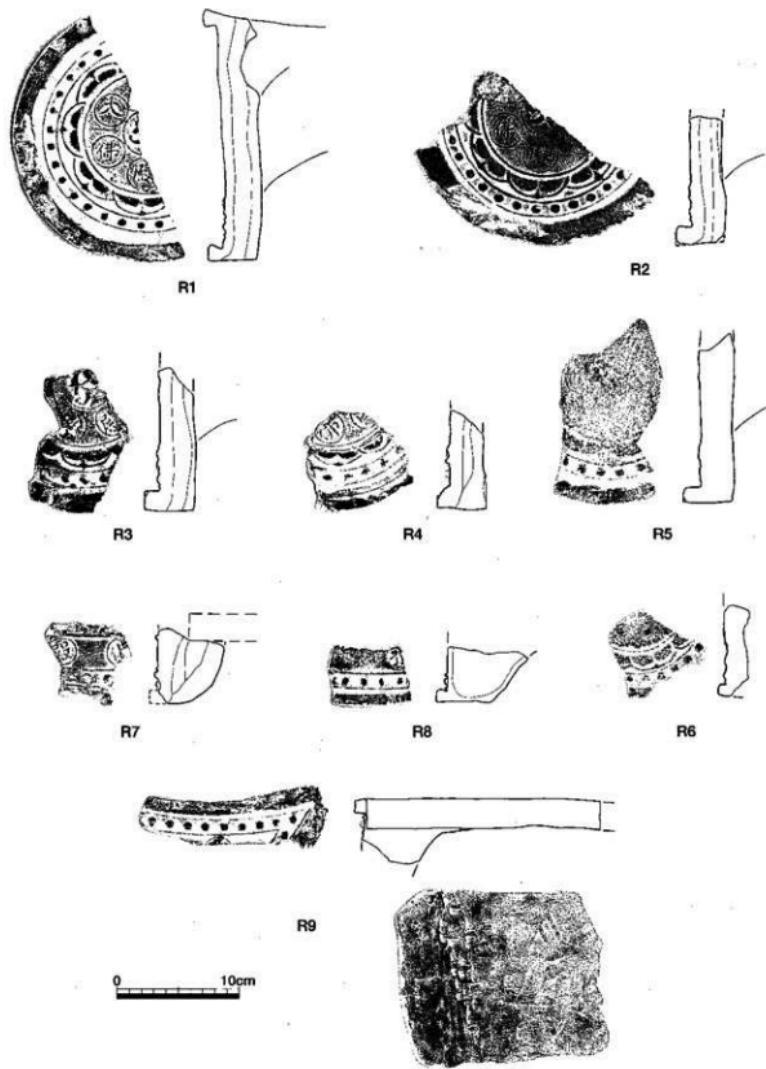
軒平瓦の文様は、軒丸瓦と同じように円環をめぐらせた梵字を中央に置き、その左右に「東大寺大仏殿」の銘文を1字ずつ円環に入れて配し、外区・脇区に珠文を配している。そして、文字を囲む個々の円の中が、半球状に盛り上がるのと半らなものとで大きく分かれる。

今回の調査では、軒丸瓦が大寺山地区から6点、上の山地区から1点出土し、軒平瓦が大寺山地区から1点、上の山地区から3点出土した。いずれも破片であることから、残りのよいものについて図示している（第56図）。

R 1～R 5は、東大寺瓦の軒丸瓦である。このうちR 3は上の山地区、その他は大寺山地区から出土している。山崎信二氏の分類では、R 1とR 2が1類Eに、R 3が1類Bに、R 4が1類Aにあたるものと思われる。R 5はマツツが著しく、よくわからない。いずれも範型に粘土を詰める時には、3回ほどに分けて詰めているようである。そして全体を丁寧にナデ調整している。

R 6は上記のものとは文様が異なるが、類似した軒丸瓦である。他に2点上の山地区から出土している。これは、一般的な東大寺軒丸瓦より一回り小さく、中房に蓮子が配置されている。東大寺瓦窯操業時のものかその前後のものかは、出土状態からは判断できない。中房が梵字で、瓦の大きさが異なるが、岡山市一ノ宮字山神出土瓦として報告されているものに類似している（註4）。

R 7～R 9は、東大寺瓦の軒平瓦である。R 7は大寺山地区、R 8・9は上の山地区から出土して



第56図 瓦1 軒瓦 (1/4)

いる。山崎信二氏の分類では、R 7はAかB、R 8・9はBにあたると思われる。R 8の平瓦との接合面には、平瓦のキザミの痕跡があった。R 9は、平瓦凸面との接合部に叩きの痕跡が残る。

2. 平・丸瓦

平瓦については、県報告でも指摘があるが、厚さの厚いもの（2.3cm前後）と薄いもの（1.6cm前後）がある。また、焼きのよい須恵質のものがほとんどであるが、瓦質や土師質などのものもある。調整は、凸面では叩目を明確に残すもの、叩き後にハケ状工具でナデ消したもの、ケズリやナデ消しをしているものがある。凹面では布目を残すもの、ナデ消したものがある。また、凸面には離れ砂の使用が見られ、中には多量に付着しているものも存在する。このように、瓦の厚さ、焼成、調整などに多様性がある。工人組織なども含めて、今後は万富産の焼成瓦を検討していく必要があると思われる。

丸瓦は、ほとんどが小破片であったが、玉縁付丸瓦の凸面は叩きを基本的にナデ消しており、凹面はほとんどのものが布目を残す。後述のように釘孔を持つものがある。平瓦同様に、厚さの厚いもの（2.6cm前後）と薄いもの（1.8cm前後）があり、胎土・焼成・色調は基本的に平瓦と同じである。また、凹面に「東大寺」刻印がみられるものが数点あった。

3. 叩目文様

「東大寺瓦」の特徴として平瓦凸面に残る叩目文様がある。県報告では、この叩目文様を1型から7型まで分類し、さらに1型を4種と3型を2種と分けているが、まだ細分できることを指摘している。また、1つの窯（群）で焼成された瓦の叩目文様の種類が限られることや、1型と7型が瓦窯操業初期のものと推定している。1型～6型は基本的に格子目文で、7型は縄目文である。

叩目文様の残る瓦は、県報告の分類に従って第57図のように分類した。それぞれ格子の大きさや線の太さなどから細分できるようであるが、5型についてのみ5A・5Bと2つに細分した。5Aは、県報告と同一のもので複線の斜格子文である。5Bは、5Aより格子の内角が異なって横長に交差している。5B-1は5型というよりも1Cに類似し、1Cの格子がまばらになっている感じに見える。5B-2は5B-1に交線が見られないもので、複線で波形になり、5型の範疇ではなく別の文様として考えた方がよきようであるが、今回はここに含めた。この2つの型は、防府阿弥陀寺から1B・3A・7型と共に出土している（註5）。

表1は、文様別に瓦数量を表示したものである。県報告では数量で表されているが、今回の調査では出土量が多量であるため、重量で示している。

大寺山地区では1B・3A・7型が多く、上の山地区では1B・1C・5A・5Bが多い。場所によって文様が分かれることが推測され、窯（群）別に工人が分かれていた可能性がある。防府阿弥陀寺など東大寺以外に運ばれた瓦と、東大寺用の瓦と造り分けをしていたとも考えられる。

表2は、遺構別に瓦数量を表示したものである。

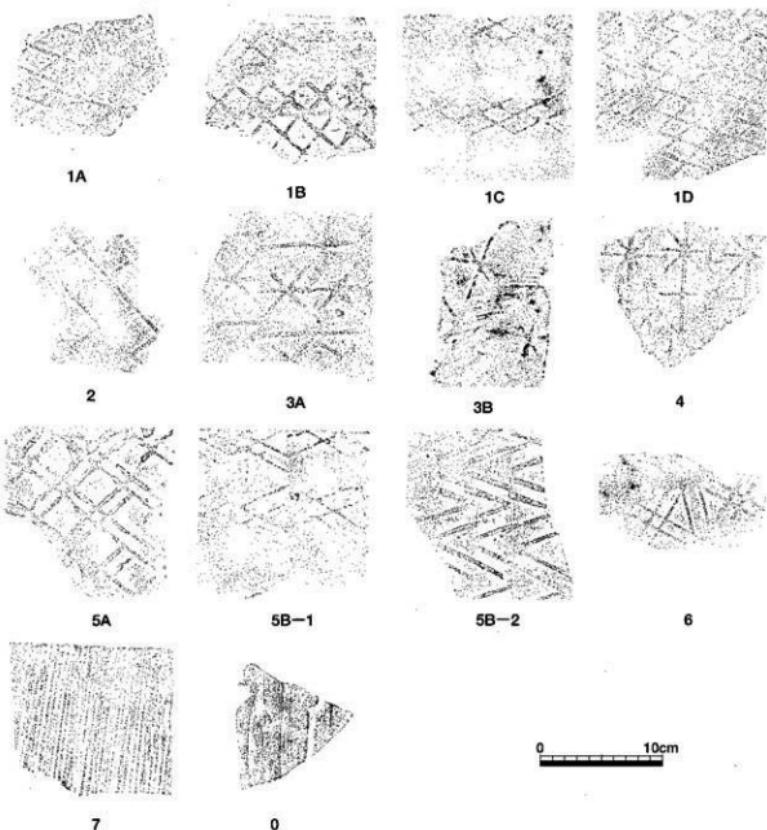
瓦窯（SO-1）は、焚口部のみであったため、瓦はほとんど出土していない。瓦だまりは先に述べたように（第4章第2節参照）、遺構に伴うものとして取り上げた数量が少なく、あまり参考にならないが、SK-1以外は3A・7型が主に出土している。瓦窯（SO-1）がSK-1を整地して造られていることが、数値に表れていると思われる。

瓦窯灰原は3A・7型が多いが、3B・5・6型を除いてほぼすべての文様が出土している。複数

の窯で焼成された瓦が、含まれていることが推測される。

礎石建物は、瓦を取り上げていないため、数値は破片点数を示した。3A型が多く、1B・5B・7型が数点含まれる。不明のものを合わせて44個の瓦片を、地覆石がわりに利用していた。3A型の窯が近くにあるのか、3A型の焼成時期に構築されたと推定できる。

排水施設は、遺構検出面までの堆積土層から出土した瓦重量である。3A・7型が圧倒的に多い。構築時に近くの瓦窯から運んだとすると、近くにその型の叩目文様瓦を焼成した窯があったと考えられる。また構築時が、3A・7型が焼成されていた時期であるとも思われる。



第57図 平瓦叩目文様分類図 (1/4)

表1 瓦出土数量表

単位:(kg)

型	B区(大寺山) 刻印	F区(上の山) 刻印	計	特 徴	県 報 告	備 考
1A	3.7	1.2	4.9	斜格子文、格子が均等である		刻印有
1B	11.3	11.8 ○	23.1	斜格子文、格子が菱形で2段より小さい		刻印有 防府阿佐陀寺
1C	1.5	29.6 ○	31.1	斜格子文、格子が不均等である		
1D	1.8 ○	2.6	4.4	斜格子文、格子が均等で1Aより小さい		
2	3.3 ○	0.5	3.8	斜格子文、格子が均等で1Aより大きく縁が無い	13号窯埋上から多数出土。	刻印有
3A	24 ○	2.1	26.1	菱形文に横線を交点で交差させたもの、格子が大きい	13号窯埋上から多数出土。	刻印有 防府阿佐陀寺
3B	1.5 ○	0	1.5	3Aより菱形の内角が異なる		
4	1.5 ○	0	1.5	3型に縫縫を交点で交差させたもの、格子が大きい	10-11-12号窯埋上から多数出土。	
5A	3.4	140.8 ○	144.2	1型や2型を複数にしたもの	「上の山」から多数出土	刻印有
5B	3.4	28.5 ○	31.9	5Aより格子の内角が異なる		防府阿佐陀寺
6	0.6	1.4	2	3型を複数にしたもの	2号窯内壁と3号窯窓 休着から多数出土	刻印有
7	64 ○	3.7	67.7	調印文		刻印有 防府阿佐陀寺
0	173.5	333.8	507.3	印目文様をケズリ消したもの (不明文様も含む)		
不明	56	25.2	80.2			
丸瓦	16.8	32.3	48.9			
計	365.1	613.5	978.6			

*刻印は○印が出土しているもの、◎印が多数出土しているもの

表2 造構別瓦出土数量表

単位:(kg)

型	瓦窓(SO-1)	瓦だまり(SK-1)	瓦だまり(SK-2)	瓦だまり(SK-3)	瓦窓灰原(85レシチ)	礎石建物	積木施設(88レシチ)
1A	0	0	0	0	2	0	0
1B	0	0.3	0	0	0.7	3	0.4
1C	0	0	0	0	1.9	0	0.4
1D	0	0	0.3	0	0.8	0	0
2	0	0	0.5	0.4	1.7	0	0
3A	0.5	0	1.5	1.3	2.8	18	12
3B	0	0	0	0	0	0	0.7
4	0	0	0	0	0.2	0	0
5A	0.1	0	0	0	0	0	0
5B	0	0	0	0	0	1	1.1
6	0	0	0	0	0	0	0
7	0.6	0	3.1	1.8	5	4	13
丸瓦	0	0	0.5	0	2.2	0	14.4
計	1.2	0.3	5.9	3.5	17.3	26	42

*礎石建物の数値のみ点数

4. 「東大寺」刻印瓦

「東大寺瓦」のもう一つの特徴として刻印がある。刻印は、縦約5cm、横約2cmの隅丸長方形で、外郭に突線を巡らせて「東大寺」銘を陽刻している。刻印の形態・文字などの種類は多種類におよび、多くは平瓦の凹面に1つあるのだが、まれに2・3つ押したもの、丸瓦の玉縁部近くの内面に押されたものが見られる。

県報告では、「東大寺」刻印の集成を行い、鐘楼修理報告（註6）と比較検討して、万富東大寺瓦窯跡で焼成されたものが、東大寺鐘楼にも使用されていたことを指摘している。また、「東大寺」刻印と卯日文様とが密接な関係にあると推測している。

今回の調査では約130点出土しており、2つ刻印のあるものや、丸瓦内面に押されたものもあった（註7）。ここでは、比較的残りの良いものを選び出して集成した（第58図）。比較数量に偏りがあるが、簡単に検討を行う。

この図は、県報告と同様に卯日文様別に並べ、記号の最初の数字は卯日文様の型式を示している。0は、卯日文様不明のものである。また、県報告より抜粋した吉備津宮常行堂跡出土瓦の刻印も載せている。また、（大）は大寺山地区、（上）は上の山地区、（吉）は吉備津宮常行堂跡を示している。1C-1、4-1、0-1、0-2、0-3は刻印が2つあり、0-4は丸瓦内面にある刻印である。なお、7-1は第61図のR20、7-4は第61図のR19の平瓦の刻印である。

同じ刻印を持つものは、1C-1と5A-1と5A-2と5B-1（Iグループ）、3A-1と3A-2と7-2と7-3（IIグループ）、1D-1と3A-3（IIIグループ）である。なお、IIグループとIIIグループは、文字の形態や太さが類似している。

また、Iグループと文字の形態や太さが類似するものは、1C-2、1-1、3B-1、3-1、7-4、7-5である。II・IIIグループと類似するものは、3-2、4-2、5A-3、7-1である。なお、4-1は文字の形態が異なって細く、4-3は「東」の文字が異なっている。

Iグループはすべて上の山地区出土であり、IIグループ、IIIグループはそれぞれ大寺山地区出土であることから、刻印によって地区別に分かれそうである。また、同一卯日文様でも数種類の刻印があり、違う卯日文様にも同一の刻印が見られる。

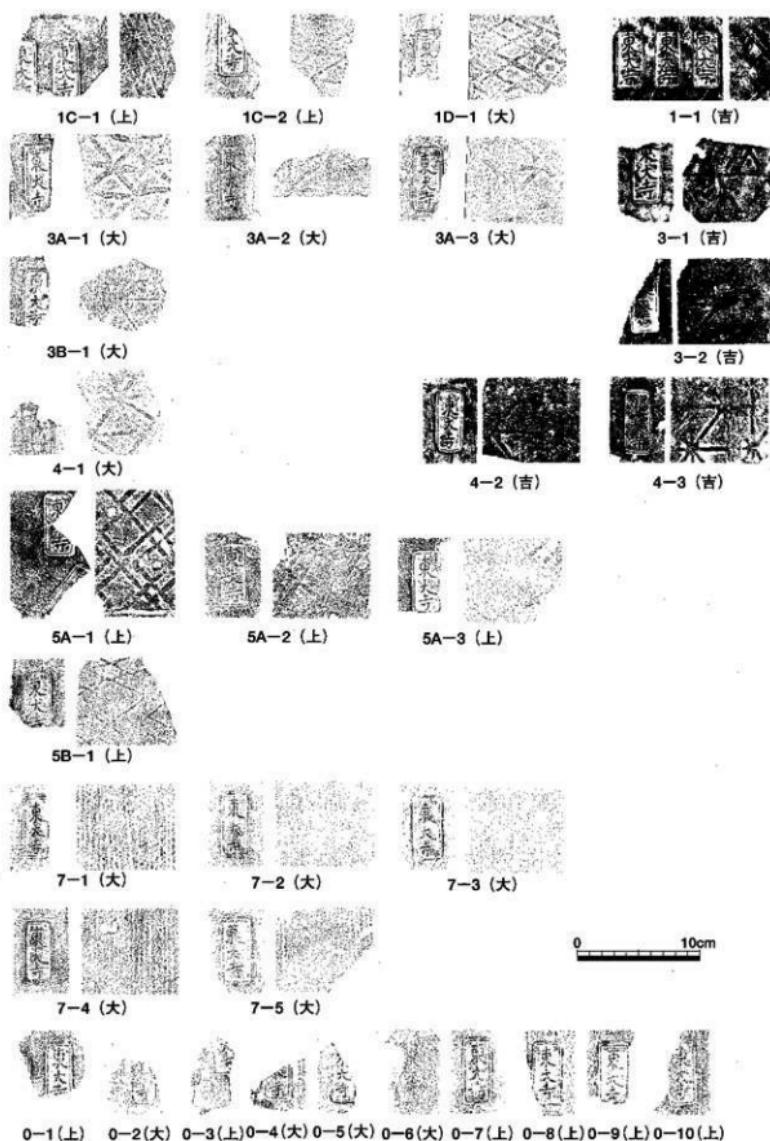
吉備津宮常行堂跡出土瓦の刻印は、卯日文様が1・3A・3B・4型と思われる。3-1はIグループに完全に一致しないが、非常に良く似ており、4-2も7-1とは完全に一致しないが、非常に良く似ている。

表1に見られるように、ほぼすべての卯日文様に刻印が見られた。しかし、すべての瓦に刻印が押されていたわけではないようである（註8）。現存しているすべての完形品を調べることにより、刻印の押された意味がみえてくるのではないかと思われる。

5. 特殊な瓦・製作技法等がわかる瓦・埴

今回の調査では、多数の瓦が出土している。その中には、特殊な形態のものが数点あるのでここに報告しておく。

R14は、平瓦の凸面に四角い突出部が付いていたもので、1C（5B？）型と思われる卯日文様がある。R13は、同一個体ではないが、突出部の破片である。R13・14とも「上の山」から出土して



第58図 「東大寺」刻印集成図 (1/4)

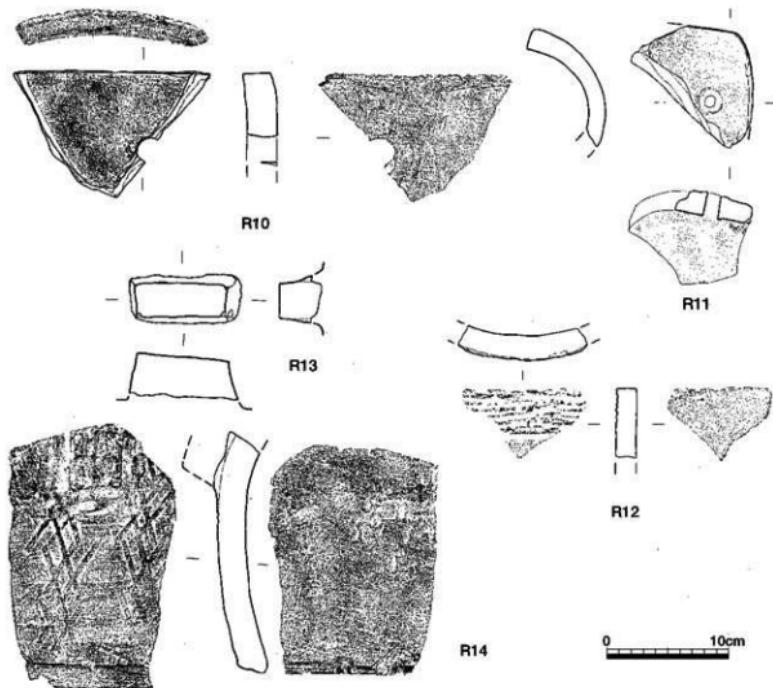
いる。R13とR14は、いわゆる引掛け瓦であり、軒平瓦の凸面に四角い粘土塊を接合したものと思われる。接合部は、ナデ調整されている。

このような引掛け瓦は、防府阿弥陀寺蔵の軒平瓦などにあり（註9）、生産地の万富窯での発見が期待されていたものである。

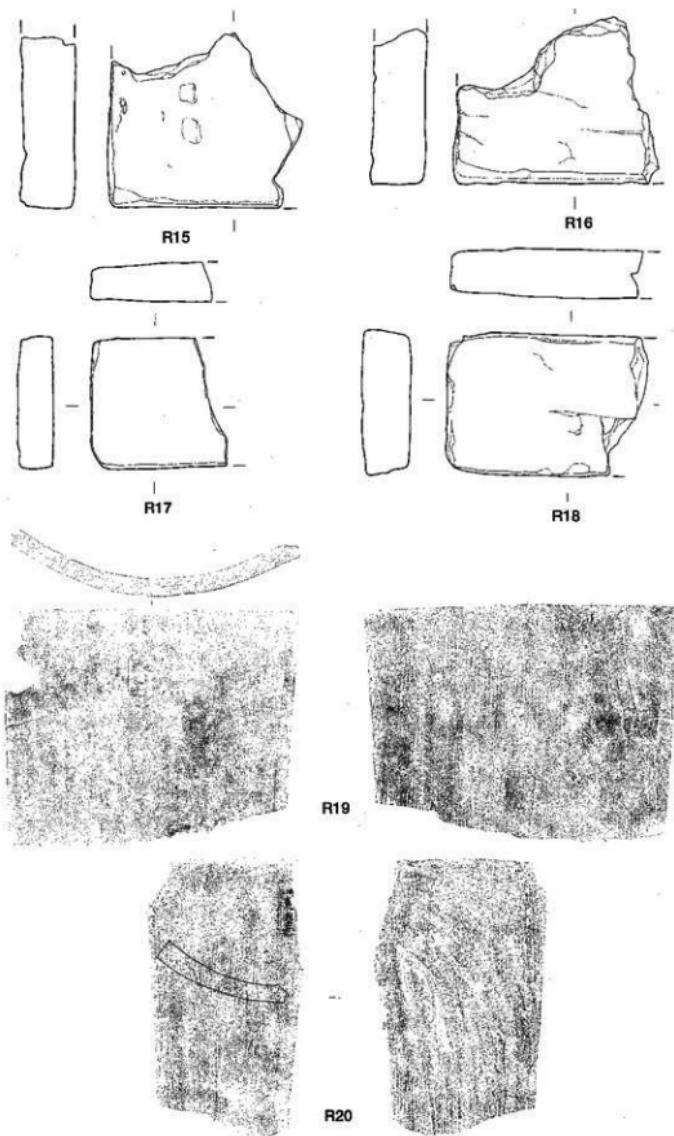
R12は、平瓦で凸面端部にキザミをつけている。これは、瓦当との接合状況がわかる資料であり、このようなキザミを持つ資料は、丸瓦端部片でも確認された。

R11は、丸瓦の土縁部の破片で丸孔がある。R10は平瓦であるが、釘孔と思われる丸孔が開けられている。

なお、瓦とは異なるが、博が出土している（第60図）。平面の形がおそらく正方形になると思われるもの（R15・16）と、長方形になるもの（R17・18）の2種類あるようである。型枠に粘土を入れて、余分な粘土を削り取って製作しているようだ。全体にナデ調整されるが、削り取った面の調整は粗雑である。



第59図 瓦2 引掛け瓦ほか (1/4)



第60図 塗 (1/4)・刻印瓦 (1/6)

註

- 1 同本寛久「泉瓦窯跡・万古東大寺瓦窯跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告37 岡山県教育委員会 1980
- 2 山崎信二『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第59冊 奈良国立文化財研究所 2000
- 3 芦田淳・「鎌倉時の南部の造瓦—東大寺を中心にして—」「重源のみた中世—中世前半期の特質—」シンポジウム「重源のみた中世」実行委員会 2002
- 4 註1の第42図の1
- 5 防府市教育委員会「平成12年度防府市内遺跡発掘調査概要」防府市埋蔵文化財調査機要0201 2002
- 6 奈良県教育委員会「国宝東大寺鐘樓修理工事報告書」1967
- 7 註1文献では、万古出土、瀬戸町教育委員会保管、吉備津宮常行堂跡地出土、岡山県立博物館蔵品の瓦に2個・3個刻印を押印する例、丸瓦の内面に押印する例（第33図の2）が報告されている。
- 8 瀬戸町出土には、現地や山井川底から出土した瓦が収蔵されている。ほぼ完形の丸瓦7点、平瓦1点には、「東大寺」刻印は見られなかった。
- 9 防府市教育委員会の杉原和恵氏から、防府阿弥陀寺蔵例をご教示いただいた。山崎信二氏の「中世瓦の研究」では、東大寺例や小野市淨上寺例について記載がある。

第5章 出土瓦・土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学院所

白石 純

第1節 分析の目的

万富東大寺瓦窯跡からは、瓦窯以外に日常で使用される土師質鍋、須恵質の擂鉢（備前系）などを焼成したと考えられる土器窯が確認されている。また、瓦窯が立地する丘陵斜面部では、良質の粘土が産出する。この胎土分析では、蛍光X線分析法により胎土中の成分（元素）量を求める方法で、瓦、土器類の胎土を分析し、以下のことについて調べた。

瓦については、形態・技法的特徴により分類されているものが、胎土的に差異があるかどうか。また、瓦窯灰原およびその周辺で産出する粘土と、瓦の胎土が同じかどうか、比較検討した。

上器類については、上器窯（S O - 3、4）から出土した土師質鍋、須恵質擂鉢（備前系）が、瓦窯灰原およびその周辺で産出する粘土を使用して焼成されたのかどうか。また、この上器窯（S O - 3、4）以外で出土した土器には土師質碗・鉢、小皿などがあり、これら両者の土師質土器の比較を行い、胎土的に識別できるかどうかを検討した。

第2節 分析方法・結果

分析装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析計（セイコーインスツルメンツ社製2010L）を使用し、試料、測定方法などは従来までの方法で実施した。

分析した試料は、表3に示した、瓦64点、土器48点、丸窯・上器窯の窯壁9点、粘土17点である。

分析の結果、Si（珪素）、Ti（チタン）、Al（アルミニウム）、Fe（鉄）、Mn（マンガン）、Mg（マグネシウム）、Ca（カルシウム）、Na（ナトリウム）、K（カリウム）、P（リン）、Rb（ルビジウム）、Sr（ストロンチウム）、Zr（ジルコニウム）の13元素についての成分分析を行った。このうち、Ti、Ca、K、Rb、Srの各元素の差が見られることから、K-Ca、Ti-Ca、Rb-Srの各XY散布図を作成して検討した。

1. 瓦の胎土分析

第61図K-Ca、第62図Rb-Srの両散布図は、瓦の散布図を示している。この散布図から瓦の形態・技法的特徴により11種類に分類されているが、これらの分類が胎土的には差異が見られず、ほぼ一つのグループにまとまっている。そして、平・丸・刻印などの器種別に分類されている瓦の間でも、胎土的な差はなかった。また、瓦窯灰原および周辺で産出する粘土との比較でも、瓦と粘土の胎土がほぼ同じ分析値となっていた。しかし、万富太田住宅地の地下より採取した粘土は、Ca量が他の粘土や瓦よりもやや多く含まれており、若干異なっていた。

2. 土器の胎土分析

第63図K-Ca、第64図Rb-Srの両散布図では、土器窯(SO-3、4)出土の土師質鍋、須恵質擂鉢(備前系)と備前擂鉢、および灰原出土の粘土との比較を行った。その結果、土器窯(SO-3、4)内出土の土師質鍋と須恵質擂鉢(備前系)は、ほぼ一つにまとまった。ただ、No.2擂鉢(備前系)のみは単独で分布し、他の擂鉢と異なっていた。

上器窯(SO-3、4)出土土器と備前擂鉢との比較では、第64図Rb-Sr散布図で両者ともほぼ識別された。そして、土器窯(SO-3、4)灰原出土粘土との比較では、粘土に比べて土器窯(SO-3、4)出土土器がSr量を多く含んで異なっていた。

第65図K-Ca、第66図Rb-Srの両散布図では、土器窯出土土器と土器窯以外から出土した土器との比較を行った。その結果、土器窯(SO-3、4)出土土器の分布範囲内には土師質鉢があり、土師質椀や小皿は土器窯(SO-3、4)と分布範囲が半分ほど重複した。そして、第67図Ti-Ca散布図では、土器窯(SO-3、4)出土土師質鍋、上師質鉢、土師質土器(回転糸切り・ヘラ切り)、擂鉢(備前系)と、小皿、土師質椀の二つのグループに分類できた。

第68図のTi-Ca散布図では、土器窯(SO-3、4)出土土器と備前・龜山・勝間田の各窯跡試料とを比較した。その結果、土器窯(SO-3、4)出土の土器は、他の窯跡と識別できた。また、万富瓦窯跡より出土した外面に格子目タタキが施された甕の破片は、この散布図で勝間田焼の分布域に分布した。

第3節 まとめ

この胎土分析で明らかになったことを整理し、若干の考察を行い、まとめとしたい。

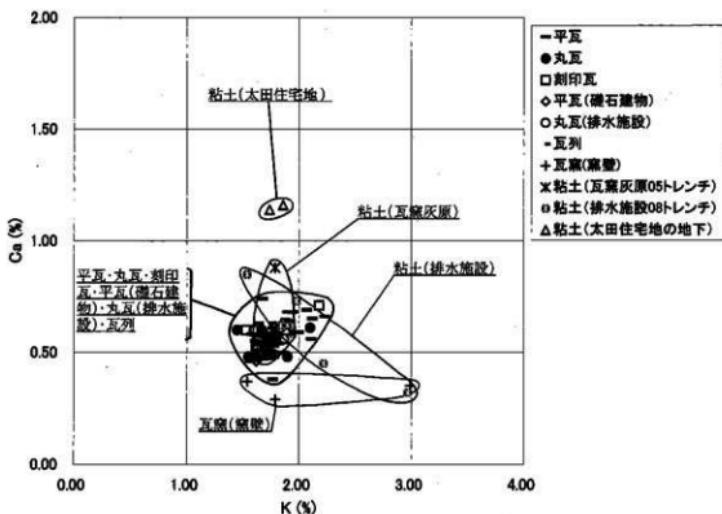
- (1) 瓦の分析では、器種・形態・技法的な違いが胎土に見られるかどうか調べたが、差は見られず、むしろ万富瓦窯の瓦として一つにまとまった。また、瓦窯灰原およびその周辺の粘土との比較では、瓦窯灰原の粘土とほぼ同じ胎土であった。また、万富太田住宅地の地下より出土した粘土とは、少し異なっていた。つまり、瓦より粘土の方に、Ca量がやや多く含まれていた。しかしながら、この点を除いて、万富瓦窯で生産された瓦は、遺跡周辺の粘土を使用して生産されていたと推定される。
- (2) 土器窯(SO-3、4)出土土器と、それ以外での出土土器の分析では、土器窯(SO-3、4)出土の土師質鍋と須恵質擂鉢(備前系)は、No.2擂鉢(備前系)を除く他のもの全てが、胎土的にほぼ一つにまとまった。そして、土器窯(SO-3、4)灰原出土の粘土との比較では、土器窯(SO-3、4)の土器と瓦窯灰原出土の粘土とは、ほぼ一致する傾向が見られた。以上のことから、万富瓦窯跡の周辺で産出する粘土には、分析値にバラツキが見られるものの、瓦と同様に、土器窯(SO-3、4)出土の土器も遺跡周辺の粘土を使用して焼成されたと考えられ、土器窯では土師質鍋や須恵質擂鉢(備前系)が生産されていたことが胎土分析で推測された。

また、この土器窯(SO-3、4)以外から出土した土器では、土師質鉢、土師質土器(回転糸切り・ヘラ切り)が、この土器窯(SO-3、4)の胎土と類似していることが分かった。今後、分析

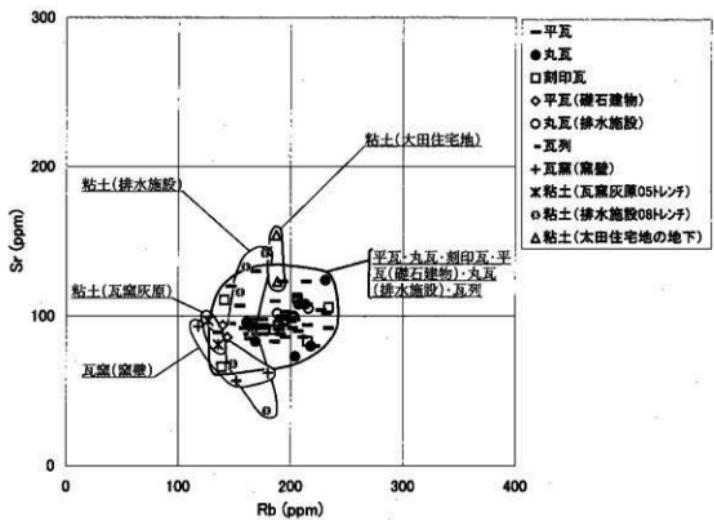
試料を増やして再検討する必要があるが、これらもこの遺跡の周辺で生産されていたのかもしれない。

以上のように、万富瓦窯跡で生産された瓦、土器類の胎土分析値の範囲がほぼ確定でき、今後の中世瓦、土器の生産地推定に向けての基礎的なデータが揃った。また、中世須恵質土器の産地である備前、龜山、勝間田などの生産地データと比較したところ、識別が可能であった。しかしながら、備前や勝間田では試料点数が少ないこともあり、測定試料を増やして再検討する必要がある。

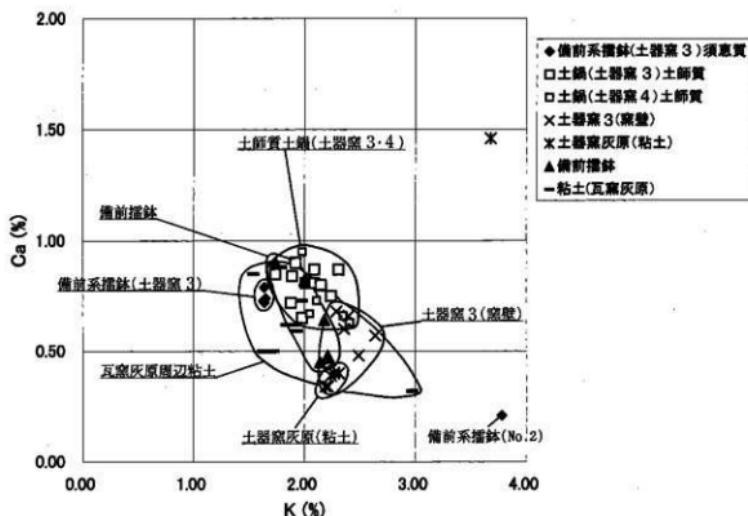
この胎土分析を実施するにあたり、岡山県古代古備文化財センターからは、分析試料を提供して頂いた。記して感謝致します。



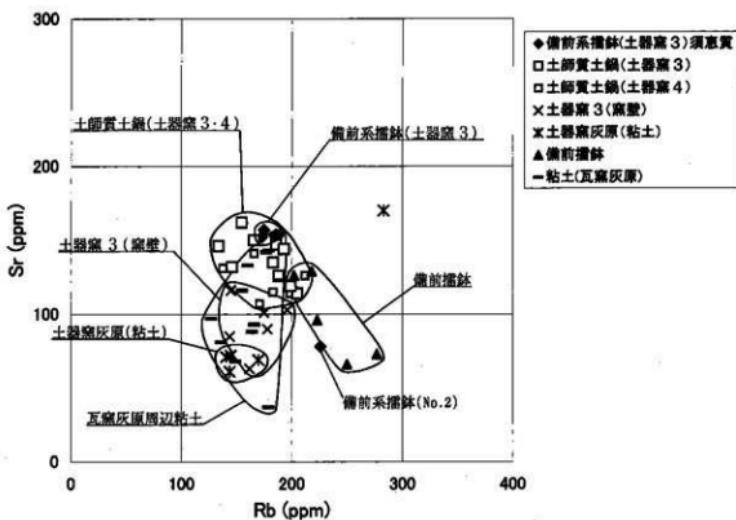
第61図 瓦類および粘土の比較 (K-Ca散布図)



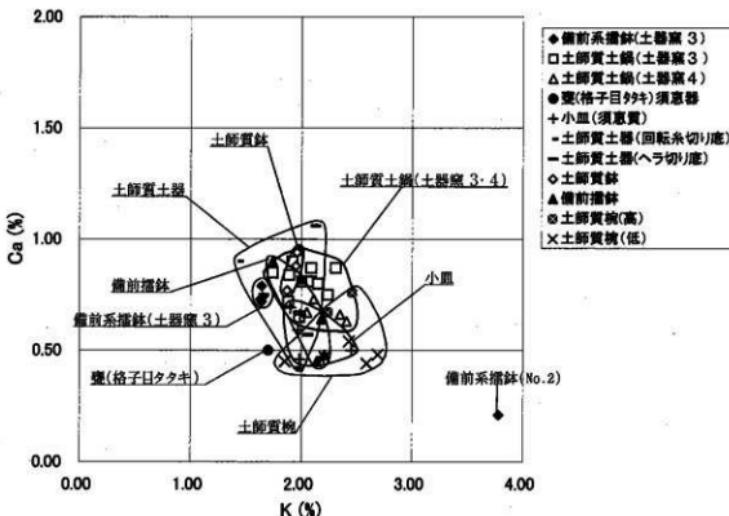
第62図 瓦類および粘土の比較 (Rb-Sr散布図)



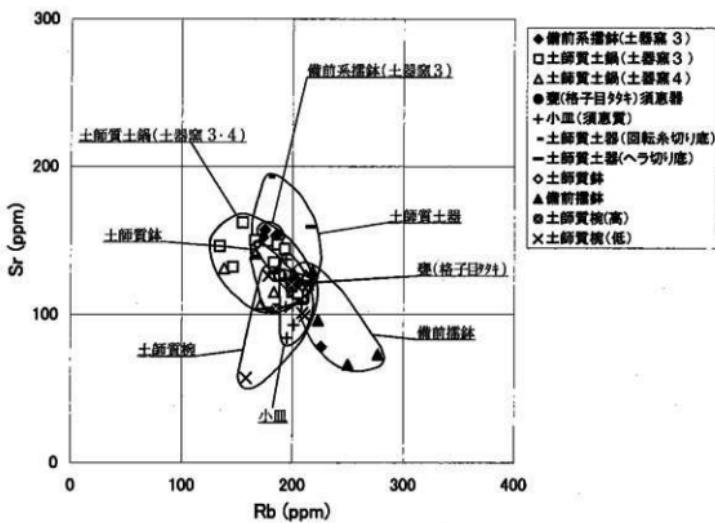
第63図 土器窯の資料および他の土器類と粘土の比較 (K-Ca散布図)



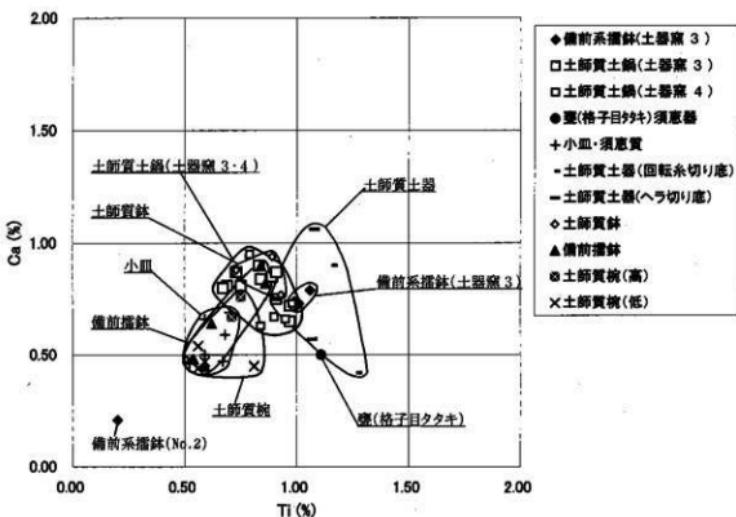
第64図 土器窯の資料および他の土器類と粘土の比較 (Rb-Sr散布図)



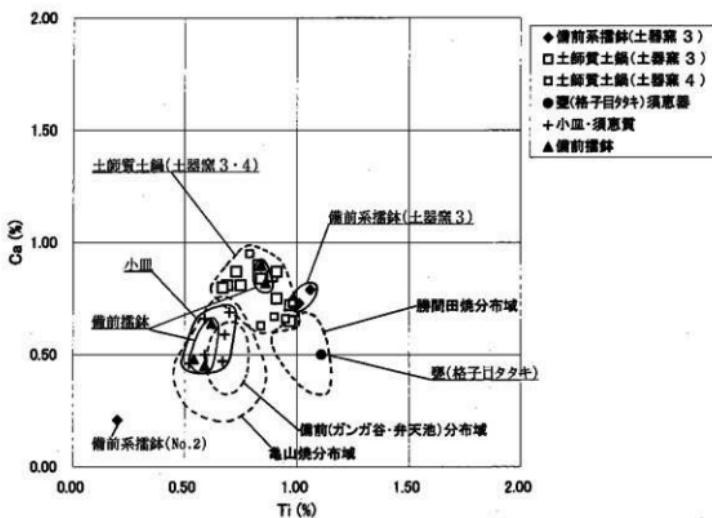
第65図 土器窯の資料とその他の土器類との比較 (K-Ca散布図)



第66図 土器窯の資料とその他の土器類との比較 (Rb-Sr散布図)



第67図 土器窯の資料とその他の土器類との比較 (Ti-Ca散布図)



第68図 土器窯の資料および土器類と各須恵質土器生産地との比較 (Ti-Ca散布図)

第6章 まとめ

1. 遺構について

(1) 古墳時代

大寺山地区では、科学探査を行っている時から、5世紀代の須恵器片が表採されている。発掘調査中も、同時期の須恵器片が出土した。古墳時代の遺構は発見されなかったが、「大寺山」丘陵に古墳などが存在していたと推測され、東大寺瓦焼など大規模な後世の開発により、破壊されたものと思われる。ただし、万富周辺では、松尾古墳群などの後期の群集墳が多い。

(2) 万富東大寺瓦窯操業時（鎌倉時代初頭）

今回の調査では、万富東大寺瓦窯の中心的存在である瓦窯の確実なものは、1基（S0-1）しか確認できなかった。しかし、その周囲の瓦だまり（SK-1、2、3）から、その山側（東側：現在は墓地となっている）には未確認の瓦窯があるものと考えられる。

また、05トレチから瓦窯の灰原が確認されている。この灰原に伴う瓦窯は確認できていないが、科学探査結果から隣接する東の段に2基の窯体の可能性が指摘されている（第3章 第20図c、d）。この灰原は、出土瓦にほぼすべての叩目文様があることから、複数の窯で焼成された瓦が堆積したものと推測される。

瓦窯以外の注目される遺構としては、礎石建物、排水施設がある。これらは、瓦窯・工房以外の遺構として、初めて明確に確認されたものである。

礎石建物は、南東隅しか残存していなかったが、地山面を削って整地した後に礎石を据え、その間にやや小型の石や「東大寺瓦」片を、地覆石として利用している。その石・瓦列の上には、おそらく塗壁があり、壁の内側に小型の石を置いていたようである。また、雨落ち溝のコーナーが丸く、遺構検出面で周囲から瓦があまり出土していないことから、おそらく草葺屋根であったと思われる。建物は、南北が桁行、東西が梁行で、5間×2~3間であると推定される。地覆石に瓦を利用しているのは、瓦生産地であり、瓦の方が平坦面を揃えるのに実用的であったからであろう。また、柱は壁に塗り込められていたと考えられ、香川県長尾町「細川家住宅」のような建物であったと推測される（註1）。礎石使用の立派な建物であったことから、行動力豊かな重源上人が訪れていた可能性は大きい。

排水施設は、東西約2mしか残存していなかったが、丸瓦と平瓦の完形品を利用している。このような状態に平瓦と丸瓦を組み合わせている暗渠は、他に例がなく、珍しいものであり、瓦生産地ならではのものと思われる（註2）。あえて暗渠にしているのは、その上面を作業場や作業道などとして利用していたと考えられる。東側に排水を要する施設があったと思われるが、どのような施設であったのかは不明である。今後の調査に期待したい。

(3) 土器窯操業時（鎌倉時代中頃～室町時代初頭）

土器窯2基（SO-3、4）は、礎石建物や掘立柱建物、瓦列の南側に隣接して検出された。出土した土器や遺構の切り合いから、礎石建物（東大寺瓦窯操業時）より新しいものである。穴窯を構築して備前系須恵質土器や瓦質・土師質土器を焼成した後、ダルマ窯を構築して鍋や釜を主体とする瓦質・土師質土器を焼成したと考えられる。SO-3は、鎌倉時代中頃を中心に、SO-4は、鎌倉時代後半から室町時代初頭に操業されたと推定される。

なお、両窯で焼成された土器は、胎土分析によって在地粘土、「東大寺瓦」と一致している。胎土は、全体的に砂粒を多く含み、「東大寺瓦」も同様である。胎土の砂粒の多さが、万富で焼成された焼物の一つの特徴といえるだろう。

また、礎石建物北側の溝（SD-1）内の堆積土と10トレンチの溝内の堆積土には、多数の瓦質・上師質土器を含んでいた。「大寺山」の各所で、上器窯が構築されていた可能性が考えられる。

掘立柱建物は、03、04、15トレンチで検出されたそれぞれ溝が、掘立柱建物の伴う同一のものと推測し、東西約8m、南北約12mの区画溝の内側に構築されたと考えている。この建物は、土器製作の工房として、上器窯と並存していた可能性も考えられる。

(4) 瓦列（室町時代）

瓦列は、掘立柱建物が廃棄された後に、何らかの区画のために構築されたと考えている。壁などを築くための地覆石的なものと推測すると、堀があった可能性も考えられる（註3）。もし堀であれば、莊園領主や土豪の館や寺院があったかもしない。また、「大寺山」という地名から、かつて寺院があったことを示しているという考え方もある（註4）。

また、瀬戸町内の田原用水は、地名などから、それまでに既存していた堀を連結したと考える見方がある（註5）。「大寺山」を取り囲んでいる区間は、堀であったとは推定されていないが、館や寺院が存在していれば堀があつても不思議ではない。この時代は、民衆を布教の対象とした独創性豊かな宗派が多くあり、地方において自治的勢力が強まる頃である。いざれにしても、東大寺瓦生産や土器生産以外の大規模施設の存在を思わせる遺構である。

2. 万富産東大寺瓦

「東大寺瓦」およびその関連する瓦の消費遺跡としては、県内では遺跡に隣接する阿保田神社境内のほか、吉備津宮常行堂（岡山市吉備津彦神社境内）、備前国府近くの大湯屋（岡山市湯泊淨土寺境内）などがある（註6）。県外では奈良東大寺以外に、東大寺造営料国であった周防国府や周防国別所が置かれた阿弥陀寺で出土しており（註7）、重源上人と関わりのあるところである。

万富窯の東大寺瓦は、東大寺だけでなく、重源上人が関わっていた建物（施設）にも使用されているようである。今後、これまで出土報告のない重源上人が設置した、別所や東大寺造営料国であった国府、結縁した寺院から万富産「東大寺瓦」が発見・報告されることが予想される。

3. 備前系須恵質土器焼成窯

今回の調査で発見された備前系須恵質土器焼成窯（S O - 3）は、間壁編年備前Ⅱ期にあたるものと主に焼成している。出土した器種は、鉢・甕・皿・碗・壺があり、備前市伊部の周辺で生産されているものと形態も類似している。鉢・甕は、この窯で焼成されたものと思われるが、皿・碗は胎土や調整に違いがみられ、すべてのものが焼成されたかどうかはわからない。また、壺もよくわからない。

また、瓦質・土師質土器の鍋・釜も出土している。焼き過ぎて須恵質上器に近いものもあることから、これらも焼成していた可能性が考えられる。

万富周辺の松尾古窯付近（註8）や鍛冶屋（註9）から、初期備前焼に類似する土器の破片と窯跡片が多数出土している。備前Ⅱ期に類似する焼物の焼成窯が、万富周辺にあることは注目すべき点である。今後、これらのほかに伊部周辺以外の吉井川下流域で、初期備前焼に類する焼成窯が発見・調査される可能性があると思われる。

4. 瓦質・土師質土器焼成窯

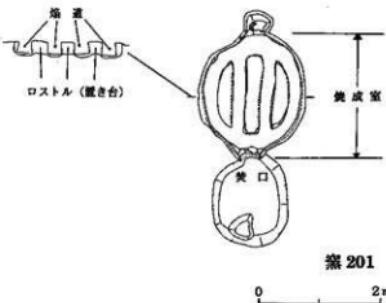
瓦質・土師質土器焼成窯は、県下で4例が発掘調査で明らかとなっている（註10）。三手向原遺跡の報告では、草原氏がその4例の比較検討と三手向原1号窯の復元を試みている（註11）。

しかし、今回の調査で見つかった土器焼成窯（S O - 4）は、これまで県内で調査されたものと形態がやや異なる。三手向原1号窯を含む4例は、焼成部がほぼ円形であり、一部には分焰のために縄を用いているものがあるが、明確な分焰床（ロストル）はない。

今回の調査の窯は、しっかりと分焰床が造られており、燃焼部も取り込んだ梢円形である。分焰床を持つ形態は、大阪府貝塚市のものがあり（註12）、このような窯は近畿に3例ほどあるようである（註13）。ただし、貝塚市の調査例のものなどは瓦窯であり、万富は土器窯である。この違いは気になるが、ひとまず瓦質・土師質土器焼成も可能であると考える。また、S O - 4から出土した鍋や釜などの瓦質・土師質土器は、その土器の形態が畿内系の様相を示しており、畿内地方の工人との関わりが考えられる。

今回の調査では、瓦質・土師質土器焼成窯およびその灰原以外に、B区の調査トレンチで瓦質・土師質土器窯の灰原と思われるものが、2か所確認されている。S D - 1と10トレンチ検出の溝である。このことから、今回発見された窯以外にも、この万富東大寺瓦窯の周辺には、鍋や釜などの瓦質・土師質土器焼成窯があることが予想される。

隣の山陽町に所在する三藏畠遺跡では、鍋や釜を主体に焼成された12世紀末～13世紀代の土師質土器焼成窯が検出されている（註14）。この1例だけでは無理があるが、この瀬戸町・山陽町近辺は鍋や釜の生産地帯であったのかもしれない。



第69図 貝塚市 加治・神前・島中遺跡（註12）

窯内や灰原から出土した土器には、鍋・釜が多く、鉢、皿（椀）も認められた。胎上分析の結果より、鉢・皿（椀）の胎土が窯内出土の土器の胎土と類似していることから、これらも焼成した可能性が考えられる。なお、吉備系土師質土器椀は、万富で焼成された東大寺瓦や瓦質・土師質土器の鍋・釜と比べて、胎土に砂粒をあまり含まないことから、この窯で焼成したものではなく、万富以外の地方から搬入されたものと思われる。この窯では鍋・釜を中心に焼成し、一部に鉢や皿・椀なども焼成していた可能性が考えられる。

この遺跡から吉井川をやや下ると邑久都長船町「福岡の市」が所在し、ここで焼成された生活雑器が、「福岡の市」などに供給されていたと考えられる（註15）。

5. 万富東大寺瓦窯

万富東大寺瓦窯の南東には、吉井川を隔てて伊部を中心に、備前焼の産地がある。東大寺瓦窯操業時には、すでに備前焼の窯は成立（備前Ⅰ期）しており、熊山山頂の寺院の瓦も焼いている。また、伊部には製品搬出に便利な片上瀬が近くにあることから、「東大寺瓦」を焼成する条件には適している。しかし、備前焼の窯は備前国司（後乗房重源）の勢力下ではなく、香登庄・熊山寺院の勢力下であることから、「東大寺瓦」は焼かれなかったと考える見方がある（註16）。「南無阿弥陀佛作善集紙背文書」には、建仁3年（1203）7月に備前國の郷・庄・保などから貢納されたものが記載されているが、当時の伊部地区が含まれていた香登庄については記載がない。このようなことから、国司の勢力がおよび、大量の瓦や材料（薪）を生産・運搬するのに適した地として、この万富が選定されたと考えられる。

万富東大寺瓦窯で生産された瓦は、鎌倉時代初期の東大寺再建のもので、大仏殿だけでなく、少なくとも回廊・中門・南大門にも使用されている。操業期間は、備前國が東大寺造営料国になった建久4年（1193）頃から重源没年の建永元年（1206）までは、行われていたと考えられている（註17）。大仏殿は、江戸時代にも公慶上人により再建されており、約13万枚の瓦が使用されている（註18）。それより一回り大きい鎌倉時代再建の大仏殿では、それ以上の瓦が使用されたであろう。東大寺大仏殿落慶供養があった建久6年（1195）には大仏殿は完成しており、建久4年（1193）頃からわずか数年でそれを補う瓦が万富窯で生産されているのである。それは、遺跡前面の粘土を大量に採った跡が、池であったという伝承（註19）からも窺われる。

万富東大寺瓦窯は大仏殿瓦を焼成した産地であるが、重源の業績が書き留められた「南無阿弥陀佛作善集」でさえ、紙背文書に「吉岡御瓦」の語句があるのみである。しかし、遺跡近くの瀬戸町大井に残る「楠田権平本」という近世文書によって、その様子を多少は窺い知ることができる。

筆者は「楠田権平本」を実見していないが、「瀬戸町誌」に原文と執筆者の私見が記載されているので、紹介しておく（註20）。

備前磐梨郡梅村（現指定地付近）には、良質の土があるため、東大寺瓦を造る地に選定された。そこからは役人や瓦職人など約80人が来て、作業員約50人がともに従事した。南都正八幡宮を勧請して社（現阿保田神社）を建て、役人詰所や作業場、宿舎などの建物が約40軒あり、瓦を焼成する窯は東・南・西にそれぞれ10基ずつの30基が造られた。それらすべてを竹垣が廻り、都合15万枚の瓦が造られて南都へ船で運ばれた（「楠田権平本」要約）。

『瀬戸町誌』の執筆者は、窯の位置関係を阿保田神社から見た位置と考え、東窯が国指定地の窯跡、

南窓が「上の山」の窓跡、西窓は未発見であるとしている。また、地形等から瓦を積み出した港は、「大寺山」南端部（梅遺跡）であると推定している（註21）。東大寺操業時の吉井川は、万富平野部に流れ込み、「大寺山」の南端と久津山の間を抜け、南方薬草社の東を流れていたと考えられている（註22）。

「東大寺瓦」は、吉井川の倉地沖からも採集されている。また、吉井川下流域でも「東大寺瓦」が発見（註23）されていることから、吉井川を利用して瓦が船で運ばれていたことは確かであろう。

今回の調査で、東大寺瓦窯操業時の様々な施設の様子が、少しだが明らかになってきた。また、この地が、東大寺瓦窯操業以後に、生活雑器の生産もしていたことが分かった。しかし、筆者の力量不足でほとんどの造構の規模を特定できず、その用途が不明なものが多い。また、情報収集不足で、他の類例を検討することがほとんどできなかった。有益なご教示を頂きながら、筆者が未熟なために、不十分な報告となつたことをお詫びするとともに、これからも諸氏先輩方のご教示・ご指導をお願いしたい。

最後に、本報告書が無事に刊行できたのは、福田正継氏、田嶋正憲氏のご協力によるところが大きい。改めて深謝する次第である。

註

- 1 松本修白先生のご教示による。なお、「細川家住宅」は近世の建物であるが、中世でも同様の建物が見られることがある。
- 2 松本修白先生のご教示による。
- 3 松本修白先生のご教示による。
- 4 岡山県赤壁教育会「改修赤壁部誌」1940による。「改修赤壁部誌」には、「大寺山」南端部が平坦地であり、地名が「大寺」であることから、東大寺別院があったと推定している。
- 5 潟戸町「瀧戸町誌」1985による。執筆者欠谷秋夫氏の私論。
- 6 岡本寛久「京瓦窯跡・万富東大寺瓦窯跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告37 岡山県教育委員会1980
- 7 防府市教育委員会「平成12年度防府市内遺跡発掘調査概要」防府市埋蔵文化財調査紙要(201) 2002
- 8 伊藤晃ほか「松尾占塚群・東富古塚群・馬屋通跡ほか」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告99 岡山県教育委員会 1995
- 9 間壁忠彦・間壁毅子「備前焼研究ノート(1) 一備前焼の成立…」「倉敷考古館研究集報」I 1966
- 10 草原孝典「三手向原遺跡一中田土師質土器と集落遺跡の発掘調査報告」岡山市教育委員会 2001による。岡山市三手向原遺跡、山陽町三藏城遺跡、鴨方町の店1号窯、笠岡市閔戸廃寺の4例。
- 11 言10の草原孝典氏文獻。
- 12 賀根市教育委員会「加治・神前・畠中遺跡の発掘調査」「かいづか文化財だよりテンプス9号」2000
- 13 加治・神前・畠中遺跡の発掘調査担当者である、三浦基氏のご教示による。
- 14 岡山県山陽町教育委員会「岩田古墳群 他野山第2・5号墳・三藏城遺跡」岡山県宮山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報(6) 1976
- 15 草原孝典氏のご指摘による。
- 16 a 間壁忠彦・間壁毅子「備前焼研究ノート(1) 一備前焼の成立…」「倉敷考古館研究集報」I 1966
b 間壁忠彦・間壁毅子「備前焼研究ノート(3) 一備前焼窯址の分布とその性格…」「倉敷考古館研究集報」5 1968
- 17 山崎耕二「中世瓦の研究」奈良国立文化財研究所学報第59回 奈良国立文化財研究所 2000
- 18 東大寺「東大寺」学生社1999
- 19 a 潟戸町「瀧戸町誌」1985による。
b 岡山県赤壁郡太田村・占岡村立千種尋常高等小学校組合「太田吉岡村誌」1924によると、「良質の粘土を有するので、万富煉瓦工場が掘り採っている」との記載あり。

- 20 a 潟戸町「瀧戸町誌」1985による。第2章第1節「東大寺再建と瀧戸町」矢部秋夫氏が執筆。
b 岡山県赤磐郡教育会『改修赤磐郡誌』1940による。「楠田権平本」の原文が記載。
c 岡山県赤磐郡太田村・吉岡村立千種尋常高等小学校組合『太田吉岡村誌』1924による。「楠田権平本」による原文が記載。
- 21 潟戸町「瀧戸町誌」1985による。地形や用水路改修時に、多量の軒平瓦や割引瓦が出上していることから、梅道跡を瓦積み出し港と推定している。
- 22 潟戸町「瀧戸町誌」1985による。
- 23 a 物部茂樹ほか「百間川米田遺跡4」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告164 岡山県教育委員会 2002
b 熊山町の美作岡山道に伴う発掘調査で「東大寺瓦」が発見されていると、松木和男氏からご教示いただいた。

遺物観察表

軒丸瓦観察表

単位(mm)

番号	型式	瓦 当面										出土場所	備考		
		内 区					外 区								
		直径	内区幅	中房径	梵字縦径	漢字縦径	弁帽	内縁	外縁	幅	高				
R1	1類 E	(208)	(138)	(97)	(34)	28	21	12	14	12	08レンチ3層	東大寺瓦			
R2	1類 E	(214)	(144)	(102)	(37)	28	21	12	17	13	05レンチ3層(裏脚付)	東大寺瓦			
R3	1類 B	(209)	(145)	(104)	(42)	26	20	13	16	11	F-3cレンチ2層	東大寺瓦			
R4	1類 A	(204)	(140)	(100)	不明	(25)	20	12	16	10	08レンチ2層	東大寺瓦			
R5	1類 不明	(212)	(149)	(108)	38	不明	20	12	13	15	B-2レンチ2層	東大寺瓦			
R6	- -	(166)	(125)	(88)	-	-	19	10	10	7	F-2レンチ2層	東大寺瓦ではない。 中房に蓮子がある			

軒平瓦観察表

単位(mm)

番号	型式	瓦 当面										出土場所	備考		
		内 区					外 区								
		直径	内区幅	梵字縦径	漢字縦径	上外区幅	下外区幅	脇区幅	外縁	幅	高				
R7	AかB 不明	28	不明	22	不明	13	不明	不明	不明	不明	不明	08レンチ3層			
R8	B 不明	不明	(22)	22	不明	12	不明	不明	不明	不明	不明	F-2レンチ2層			
R9	B 不明	不明	不明	(20)	12	不明	12	10	9	9	9	F-3cレンチ2層			

瓦類観察表

単位(cm)

番号	出土場所	種別			法量(cm)			色調	胎土	焼成	形態・調整手法の特徴	備考
		長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ					
R10	20tレンチ 喰堀	半瓦	端部		2.5	青灰色	砂粒多く含	良	凸面端部をケズりて面取りし、全体にナデ 質感している。丸穴が穿孔される。	丸穴径21mm		
R11	05tレンチ 3層	丸瓦	玉縁部		1.7	青い墨灰色	砂粒多く含	良	端部はヨコナデ、外側はナデ調整、内面は 丸穴が穿孔される。丸穴が穿孔される。	丸穴径11~14mm		
R12	B-1tレンチ 2層	平瓦	端部		1.9	灰白色	砂粒多く含	良	凸面端部に幅3cmの深いキズがある。ほ かば丁寧なナデ調整。	耳当部との接合面にナデを施している。		
R13	F-2tレンチ 2層	引掛け瓦 突起部	平瓦部	7.3	2.8	3.4	青灰色	砂粒多く含	良	ケズリのちナデ調整、粘土を蘸めて平瓦 に捺す。引掛け瓦次起部の破片。 法線は上端面。		
R14	F-3tレンチ 2層	引掛け瓦 平瓦部			2.3	青灰色	砂粒多く含	良	凸面に実ねじを接合していた跡跡がある。日 文様はEB-1型。凹面はケズリやナデ調整で 一部に布目が残る。端部は面取りしている。			
R15	08tレンチ 3層	埋			4.4	青灰色	砂粒多く含	良	裏はケズリのちとんと朱消色。ほかはナ デ調整するが粗い。	正方形の埋に なると思われる		
R16	B-1tレンチ 提乱	埋			4.2	青灰色	砂粒多く含	良	裏はケズリのちナデだが粗雑。ほかはナデ 調整するが粗い。	正方形の埋に なると思われる		
R17	F-3tレンチ 2層	埋			10.6	3.0	青灰色	砂粒多く含	良	全面丁寧なナデ調整	見方別の埋に なると思われる	
R18	F-3tレンチ 2層	埋			11.5	3.9	青い墨灰色	砂粒多く含	良	裏面は丁寧なナデ。 端部はケズリのちナデ調整が粗雑。	正方形の埋に なると思われる	
R19	B-1tレンチ 3層	平瓦		35.8	2.2	青灰色	砂粒多く含	良	凸面の押目文様は墨。一部にケズリやナデ 調整がみられる。凹面は溝部を面取りし、ナデ調 整で一部に布目が残る。「米大寺」跡。	凹面に砂粒が 付着		
R20	08tレンチ 排水施設付近	半瓦			2.2	青灰色	砂粒多く含	良	凸面に砂粒が 付着	凸面に砂粒が 多く付着		

土器觀察表

単位(cm)

番号	出土場所	範囲	器種	法量(cm) 口縫部 底径 器高	色調	胎土	焼成	形容・調取手法の特徴	備考
1	05レレンチ	3号	畿内系瓦質土器	三足付 口縫部 (14.5)	灰白色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から 14世紀前半
2	05レレンチ	3号	吉備系土師質土器	横 口縫部 (13.8)	灰白色	砂粒多く含む	良	外側下部に擦摩され痕	マツリが無い 13世紀後半
3	05レレンチ	黒褐色	吉備系土師質土器	横 底部 (7.2)	灰白色	砂粒多く含む	良	面白が高く、表面は凸凹	13世紀前半
4	05レレンチ	2号	土師質土器	直 口縫部 (8.2)	灰白色	砂粒多く含む	良	ヘア状T・長脚地脚	
5	05レレンチ	2号	土師質土器	直 底部 (8.4)	淡黃褐色	砂粒多く含む	良	内部に吸水性の地脚	
6	05レレンチ	黑色上	土師質土器	直 底部	陶灰	砂粒多く含む	良	表面へテ颗粒の、シラフ感が見られる	
7	05レレンチ	3号	土師質土器	直 底部	褐色	砂粒多く含む	良		マツリが無い
8	05レレンチ	2号	畿内系瓦質土器	片 口縫部	青灰色	砂粒含む	堅硬	端部はやや中凹みますが、ほぼ平坦	隔壁脚半偏右側
9	05レレンチ	2号	畿内系瓦質土器	横 底部 (5.8)	灰白色	砂粒含む	やや粗い	輪郭線切欠	隔壁脚半偏右側
10	05レレンチ	3号	灰褐色	變 体部	灰色	砂粒少々含む	良	表面進行跡	六朝時代
11	05レレンチ	3号	須恵器	變 体部	灰褐色	砂粒少々含む	良	外側斜行押出	古墳時代、マツリが 無い
12	05レレンチ	黒褐色	須恵器	變 体部	暗灰褐色	砂粒含む	良	外側1mm左右の毛子目叩き	古墳時代より、須恵器 は定着化
13	04レレンチ	黒褐色	畿内系土師質土器	横 口縫部 (30.0)	暗灰褐色	砂粒多く含む	良	体部外側に斜押と火鉄	13世紀後半から 14世紀前半
14	SD-1	畿内系土師質土器	横 口縫部 (31.0)	にね・黃褐色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から 14世紀前半	
15	04レレンチ	黒褐色	畿内系土師質土器	横 口縫部 (28.0)	灰白色	砂粒多く含む	良	体部外側に斜押と火鉄	13世紀後半から 14世紀前半
16	SD-1	畿内系 土師質土器	横 口縫部 (37.0)	灰白色	砂粒多く含む	良	体部外側に斜押と火鉄	13世紀後半から 14世紀前半	
17	04レレンチ	黒褐色	畿内系土師質土器	横 口縫部 (38.0)	灰褐色	砂粒多く含む	良	体部外側に斜押と火鉄	13世紀後半から 14世紀前半
18	SD-1	吉備系土師質土器	横 口縫部 (34.0)	淡黄色	砂粒多く含む	良	体部外側に斜押と火鉄、 内側にハナメ痕		
19	SD-1	土師質土器	片 口縫部 (34.4)	浅黄色	砂粒多く含む	良	外側に斜押と火鉄、内側にハナメ痕		
20	SD-1	土師質土器	端部 口縫部 (32.5)	灰褐色	砂粒多く含む	良	体部外側に斜押と火鉄		
21	SD-1	畿内系瓦質土器	三足付 口縫部 (18.4)	灰白色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から 14世紀前半	
22	SD-1	畿内系瓦質土器	三足付 口縫部 (20.3)	淡黄色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から 14世紀前半	
23	SD-1	畿内系瓦質土器	三足付 口縫部 (17.0)	にね・黃褐色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から 14世紀前半	
24	SD-1	土師質土器	蓋 碗部		灰白色	砂粒多く含む	良		
25	SD-1	吉備系土師質土器	横 口縫部 (12.0)	灰褐色	砂粒多く含む	良			
26	SD-1	土師質土器	横(直) 底部	(9.0)	淡黃褐色	砂粒多く含む	良		
27	SD-1	土師質土器	横(直) 底部	(10.0)	にね・黃褐色	砂粒多く含む	良		
28	SD-1	畿内系瓦質土器	横 口縫部 (15.8)	灰白色	砂粒多く含む	良	表面多くて棘とげが多くある。	隔壁脚半偏右側	
29	04レレンチ	黒褐色	須恵器	變 口縫部 (26.0)	灰色	砂粒少々含む	良		六朝時代
30	SD-2	畿内系瓦質土器	蓋 口縫部 (27.0)	灰褐色	砂粒多く含む	良			
31	SD-2	3号	畿内系瓦質土器	横 口縫部 (32.2)	淡黄色	砂粒多く含む	良	体部外側に斜押と火鉄。	13世紀後半から 14世紀前半
32	SD-2	3号	畿内系瓦質土器	横 口縫部 (36.0)	灰白色	砂粒多く含む	良	体部外側に斜押と火鉄。	13世紀後半から 14世紀前半
33	05レレンチ	3号	畿内系瓦質土器	三足付 口縫部 (21.0)	灰褐色	砂粒多く含む	良	丁寧な調整	13世紀後半から 14世紀前半
34	05レレンチ	3号	畿内系瓦質土器	三足付 口縫部	暗褐色	砂粒多く含む	良	丁寧な調整	13世紀後半から 14世紀前半
35	05レレンチ	3号	丸瓦土器	蓋 碗部	灰褐色	砂粒多く含む	良		
36	05レレンチ	3号	吉備系土師質土器	横 口縫部 (11.9)	灰白色	砂粒多く含む	良	外側下部に斜押と火鉄	13世紀後半から 14世紀前半
37	05レレンチ	3号	吉備系土師質土器	横 口縫部 (11.6)	灰白色	砂粒多く含む	良	外側下部に斜押と火鉄	13世紀後半から 14世紀前半

番号	出土場所	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	形態・調査手法の特徴	備考
				口径	底径	高さ					
38	061レンチ	3層	吉備系土器質土器	縦	底部	(7.6)	灰白色	砂粒少含む、泥質	良	内部が灰く、表面には凹三角形	13世紀後半
39	061レンチ	3層	土師質土器	縦	口縁部	(14.2)	に赤い褐色	砂粒少含む、泥質	良		13世紀後半
40	061レンチ	3層	土師質土器	縦	口縁部	(13.6)	に赤い褐色	砂粒少含む、泥質	良		13世紀後半
41	061レンチ	3層	土師質土器	縦	口縁部	(12.8)	灰白色	砂粒多く含む	良	内部にヘア式二重底	13世紀中葉から後半
42	061レンチ	3層	土師質土器	縦	1/6	(8.0) (5.5)	1.5	灰白色	砂粒少含む		13世紀中葉から後半
43	061レンチ	3層	土師質土器	縦	1/6	(9.0) (8.4)	1.3	灰白色	砂粒少含む		13世紀中葉から後半
44	061レンチ	3層	土師質土器	縦	1/2	(9.4) (7.2)	1.6	灰白色	砂粒少含む		13世紀初期
45	061レンチ	3層	土師質土器	縦	1/4	(7.6) (5.0)	1.4	に赤い褐色	砂粒少含む		13世紀中期から後半
46	061レンチ	3層	土師質土器	縦	3/4	8.0	6.7	1.2	に赤い褐色	砂粒少含む	13世紀中期から後半
47	061レンチ	3層	瓦質十面	火鉢	口縁部	(45.8)		灰色	砂粒多く含む	良	
48	061レンチ	4層	前田志賀質土器	縦	1/5	(14.6) (5.8)	4.5	灰白色	砂粒含む	ややあか	内丸あわらの痕、口縁部に盛れた模様
49	061レンチ	3層	前田志賀質土器	縦	口縁部	(17.2)		灰白色	砂粒多く含む	ややあか	外反して、焼けを平滑化した。外縁部は内側へ込み毛をもせて封じてある。
50	061レンチ	3層	前田志賀質土器	縦	体部			灰白色	砂粒多く含む	良	内縁にカキマサシ痕がある
51	061レンチ	3層	前田志賀質土器	縦	口縁部	(20.0)		暗青色	砂粒含む	堅致	マツメが黒い。
52	061レンチ	2層	前田志賀質土器	縦	口縁部			青灰色	砂粒含む	良	内丸あわらの痕、内縁部に盛られた模様
53	061レンチ	3層	前田志賀質土器	縦	口縁部			青灰色	砂粒含む	良	内丸あわらの痕、内縁部に盛られた模様
54	061レンチ	2層	備前燒	壺	口縁部			暗青灰色	砂粒含む	良	内丸あわらより、輪郭は下へややくぼれながら、内縁部に盛られた模様
55	061レンチ	2層	備前燒	寸切卦	口縁部			灰色	砂粒微少含む	良	内丸あわらより、輪郭は下へややくぼれながら、内縁部に盛られた模様
56	SO-3	上層	畿内系瓦質土器	縦	口縁部	(30.0)		灰色	砂粒多く含む	良	体部外面に輪郭えど。
57	SO-3	上層	畿内系土器質土器	縦	口縁部			灰黄色	砂粒多く含む	良	13世紀後半から14世紀中期
58	SO-3	上層	吉備系土器質土器	縦	底部	(5.4)		灰白色	砂粒少含む、泥質	良	内丸が強く、表面には凹三角形
59	SO-3	上層	畿内系土器質土器	縦	口縁部	(18.1)		淡黄色	砂粒多く含む	良	13世紀後半から14世紀中期
60	SO-3	上層	畿内系土器質土器	縦	口縁部	(25.0)		淡黄色	砂粒多く含む	良	13世紀後半から14世紀中期
61	SO-3	上層	瓦質土器	高台付	3/5	7.4	3.5	3.4	赤灰色	砂粒少含む、泥質	良
62	SO-3	上層	備前系須賀質土器	縦	旅部			灰白色	砂粒含む	ややあか	輪郭は内側で折れたり、内縁部に盛られた模様
63	SO-3	上層	備前系須賀質土器	縦	口縁部			灰色	砂粒少含む、泥質	堅致	内丸あわらの痕、内縁部に盛られた模様
64	SO-3	上層	備前系須賀質土器	縦	口縁部			青灰色	砂粒含む	ややあか	内丸あわらの痕、内縁部に盛られた模様
65	SO-3	上層	備前系須賀質土器	縦	口縁部			暗青灰色	砂粒少含む、泥質	堅致	輪郭は内側で折れたり、内縁部に盛られた模様
66	SO-3	上層	備前系須賀質土器	縦	口縁部	(24.0)		暗青灰色	砂粒多く含む	良	内縁部は内側で折れたり、内縁部に盛られた模様
67	SO-3	上層	須賀質土器	縦	底部			灰色	砂粒含む	良	ハナメ底である。
68	SO-3	上層	須賀質土器	縦	体部			暗灰色	砂粒含む	良	体部外面に輪郭えど。
69	SO-3	中層	畿内系土器質土器	縦	口縁部	(36.2)		に赤い黄色	砂粒多く含む	良	体部外面に輪郭えど。
70	SO-3	中層	畿内系瓦質土器	縦	口縁部			灰色	砂粒多く含む	良	体部外面に輪郭えど。
71	SO-3	中層	備前系須賀質土器	縦	口縁部	(11.0)		灰黄色	砂粒少含む、泥質	ややあか	内縁部に盛られた模様
72	SO-3	中層	備前系須賀質土器	縦	口縁部	(13.8)		灰白色	砂粒多く含む	良	輪郭は内側で折れたり、内縁部に盛られた模様
73	SO-3	中層	備前系須賀質土器	縦	底部			青灰色	砂粒多く含む	良	輪郭は内側で折れたり、内縁部に盛られた模様
74	SO-3	中層	備前系須賀質土器	縦	体部			青灰色	砂粒含む	堅致	
75	SO-3	下層	備前系須賀質土器	縦	口縁部-底部	(11.0) (5.0) (3.8)		灰白色	砂粒多く含む	良	輪郭はやや凹い。

番号	出土場所	種別	面種	位置(cm)			色調	胎土	焼成	形態・調整手法の特徴	備考
				上段	中段	下段					
76	SO-3	下層	縦断系泥質土器	鉢	口縁部	(23.6)	灰褐色	砂粒多く含む	良	表面に凹凸で、各所下間にやや焼け付けてある。内面に凹凸を残して大きく剥がれ、部分では均等。	黒塗装無底盤下層
77	SO-3	下層	縦断系泥質土器	鉢	底部		灰褐色	砂粒多く含む	良		
78	SO-3	下層	縦断系泥質土器	鉢	体部		灰褐色	砂粒多く含む	良		
79	SO-3	下層	縦断系泥質土器	盤	体部		暗灰褐色	砂粒多く含む	良		
80	SO-3	下層	縦断系泥質土器	盤	底部		暗灰褐色	砂粒多く含む	良	底面は自然崩れかぶる	
81	SO-4	上層	縦内系瓦質土器	鉢	口縁部	(26.0)	灰白色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から14世紀前半
82	SO-4	上層	縦内系瓦質土器	鉢	口縁部	(24.0)	灰褐色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から14世紀前半
83	SO-4	上層	縦内系瓦質土器	鉢	口縁部		褐灰色	砂粒多く含む	良	表面に斑状が残り、凹凸のようである。火候作付?	
84	SO-4	上層	瓦質土器	鉢	口縁部		灰褐色	砂粒多く含む	良		
85	SO-4	下層	縦内系土器質土器	釜	口縁部	(23.6)	灰白色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から14世紀前半
86	SO-4	下層	縦内系土器質土器	釜	口縁部	(24.0)	灰褐色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から14世紀前半
87	SO-4	下層	土師質土器	鉢	口縁部		灰褐色	砂粒多く含む	良		
88	SO-4	下層	縦内系瓦質土器	鉢	口縁部		灰褐色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から14世紀前半
89	SO-4	下層	土師質土器	鉢	口縁部		灰褐色	砂粒含む	良		
90	03レンチ	里窯色土	縦内系土器質土器	釜	口縁部	(25.0)	灰白色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から14世紀前半
91	03レンチ	里窯色土	縦内系瓦質土器	鍋	口縁部	(30.2)	灰褐色	砂粒多く含む	良	外側に微細な凹凸。	13世紀後半から14世紀前半
92	SK-4	縦内系瓦質土器	鍋	口縁部	(37.0)	灰褐色	砂粒多く含む	良	外側に微細な凹凸。	13世紀後半から14世紀前半	
93	03レンチ	里窯色土	縦内系土器質土器	鍋	口縁部	(22.1)	灰褐色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から14世紀前半
94	SK-4	縦内系瓦質土器	鍋	口縁部	(34.6)	灰褐色	砂粒多く含む	良	外側に微細な凹凸。	13世紀後半から14世紀前半	
95	SK-4	縦内系瓦質土器	鍋	口縁部	(40.2)	灰褐色	砂粒多く含む	良	外側に微細な凹凸。	13世紀後半から14世紀前半	
96	03レンチ	里窯色土	縦内系土器質土器	釜	口縁部	(26.0)	灰褐色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から14世紀前半
97	03レンチ	里窯色土	縦内系瓦質土器	釜	口縁部	(22.2)	灰褐色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から14世紀前半
98	SK-4	縦内系瓦質土器	鍋	口縁部	(18.1)	灰褐色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から14世紀前半	
99	03レンチ	里窯色土	縦内系瓦質土器	鍋	口縁部	(18.0)	暗褐色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から14世紀前半
100	SK-4	縦内系瓦質土器	鍋	口縁部	(16.4)	暗灰褐色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から14世紀前半	
101	03レンチ	里窯色土	瓦質土器	鉢	口縁部	(23.0)	灰褐色	砂粒多く含む	良	内面にスリメ跡	
102	03レンチ	里窯色土	土師質土器	鉢	口縁部	(20.8)	灰褐色	砂粒含む	良		
103	03レンチ	里窯色土	土師質土器	焼粘	口縁部	(20.6)	灰褐色	砂粒多く含む	良		
104	03レンチ	里窯色土	土師質土器	焼粘	口縁部	(11.6)	明褐色	砂粒少量含む、鉄物	良		
105	03レンチ	里窯色土	土師質土器	焼粘	口縁部	(10.2)	灰白色	砂粒少量含む、鉄物	良		
106	SK-4	吉備系土師質土器	鉢	底部		(4.0)	灰褐色	砂粒少量含む、鉄物	良	底面はやや低い、表面には凹、凸	14世紀中期
107	03レンチ	吉備系土	吉備系土師質土器	鉢	底部	(5.4)	浅黃褐色	砂粒少量含む、鉄物	良	底面は高く、表面は二凹、二凸	14世紀後半から15世紀前半
108	03レンチ	吉備系土	土師質土器	皿	3/4	(6.2) (5.0)	灰褐色	砂粒少量含む、鉄物	良	底面は丸くおきめ、名前は吉備系と並んで吉備燒と呼ばれる。	マツノ吉備焼 14世紀中期
109	SK-4	吉備系土師質土器	碗	口縁部	(11.8)		灰褐色	砂粒少量含む、鉄物	やや良		吉備系土師質土器
110	03レンチ	吉備系土	吉備系土師質土器	機	底部	(5.4)	灰白色	砂粒少量含む、鉄物	やや良	内面に小孔の痕	吉備系土師質土器
111	SK-4	土師質土器	皿	底部			褐色	砂粒少量含む、鉄物	良	内板未切削。	
112	SK-4	吉備系土師質土器	すり鉢	口縁部			灰褐色	砂粒少量含む、鉄物	良	吉備土器は底盤付でやや内板下方に凹凸がある。内面は表面の粗面化と共に上部を削り落す。	吉備系土師質土器
113	03レンチ	吉備色土	吉備系土師質土器	鉢	口縁部		灰褐色	砂粒多く含む	良	吉備色土器は内面でやや削り落して大きくおきめ、底盤は均等。	吉備系土師質土器

番号	出土場所	種別	器物	法量(cm)			色調	胎土	焼成	形態・調整手法の特徴	備考	
				L寸法	底径	高さ						
114	SK-4	縦前系須賀上器	鉢	底部			灰色	砂粒含む	良	端小切痕有る	同昭和初期手彌	
115	SX-4	縦前系須賀上器	甕	底部			暗灰色	砂粒含む	良	端小切痕有る		
116	SX-4	縦前系須賀上器	甕	底部			暗灰色	砂粒含む	良	端小切痕有る		
117	041レンチ	2号	丸貫土器	すり跡	口縁部	(37.2)	明黄褐色	砂粒多く含む	良	端部に凹凸有る		
118	041レンチ	3号	古須前系須賀上器	瓶	口縁部-底部	(12.0) (6.4)	4.1	浅黄色	砂粒少含む、底面	良	底面少々凹凸有る	13世紀中期
119	031レンチ	3号	古須前系須賀上器	瓶	底部	3.8	浅黄褐色	砂粒少量含む、底面	良	底面少々凹凸有る、表面は有り。やや粗粒	13世紀中期	
120	031レンチ	3号	土師質土器	瓶	把手		浅黄色	砂粒多く含む	良		平行状態の跡の記号	
121	031レンチ	3号	土師質土器	瓶	口縁部		灰黃褐色	砂粒含む	良	口縫上間に5条の沈線、内側にハナモ		
122	031レンチ	3号	白磁	皿	底部	(10.0)	灰白色	微密	良	口縫内側に11条の沈線、内側にハナモ	13世紀中期	
123	031レンチ	1号	白磁	皿	口縁部	(11.0)	灰白色	微密	良	口縫内側は無地で、外縁は模様分り、内側はハナモ	13世紀中期	
124	041レンチ	3号	須恩器	甕	底部		灰褐色	砂粒含む	良	外周に施丁口印の痕、内側に当物跡	古朝時代	
125	041レンチ	3号	須前系須賀上器	鉢	口縁部		灰色	砂粒多く含む	型致	須前系須賀上器、外縁に施丁口印を施して、内側は模様分り、底面は模様分り	13世紀中期	
126	041レンチ	3号	須前系須賀上器	鉢	口縁部		灰白色	砂粒多く含む	良	須前系須賀上器、外縁に施丁口印を施して、内側は模様分り、底面は模様分り	13世紀中期	
127	041レンチ	3号	須前系須賀上器	鉢	口縁部		灰色	砂粒多く含む	良	須前系須賀上器、外縁に施丁口印を施して、内側は模様分り、底面は模様分り	13世紀中期	
128	041レンチ	3号	須前器	すり跡	口縁部		に赤い赤褐色	砂粒含む	型致	須前系須賀上器、外縁に施丁口印を施して、内側は模様分り、底面は模様分り	13世紀中期	
129	041レンチ	3号	須前器	すり跡	底面		に赤い赤褐色	砂粒含む	型致	内側にカスケード状あらわし	13世紀中期	
130	031レンチ	3号	須前系須賀上器	甕	口縁部	(28.4)	灰褐色	砂粒含む	良	須前系須賀上器、外縁に施丁口印を施して、内側は模様分り、底面は模様分り	13世紀中期	
131	041レンチ	3号	須前器	甕	口縁部		灰色	砂粒含む	良	須前系須賀上器、外縁に施丁口印を施して、内側は模様分り、底面は模様分り	13世紀中期	
132	041レンチ	3号	須前系須賀上器	鉢	口縁部		灰色	砂粒少々含む	良	須前系須賀上器、外縁に施丁口印を施して、内側は模様分り、底面は模様分り	13世紀中期	
133	041レンチ	清	國內系瓦質土器	瓶	口縁部	(37.2)	灰白色	砂粒多く含む	良	外周に施丁口印	13世紀中期から 14世紀中期	
134	041レンチ	清	國內系瓦質土器	瓶	口縁部	(24.0)	灰褐色	砂粒多く含む	良	須前系須賀上器、外縁に施丁口印を施して、内側は模様分り、底面は模様分り	13世紀中期	
135	031レンチ	清	瓦質土器	鉢	口縁部		灰褐色	砂粒多く含む	良	須前系須賀上器、外縁に施丁口印を施して、内側は模様分り、底面は模様分り	13世紀中期	
136	041レンチ	清	占吉系土質土器	瓶	口縁部-底部	(10.0) 4.5	3.1	に赤い赤褐色	砂粒少々含む、底面	良	須前系須賀上器、外縁に施丁口印を施して、内側は模様分り、底面は模様分り	13世紀中期から 14世紀中期
137	041レンチ	清	須前系須賀上器	瓶	口縁部	(16.6)	灰白色	砂粒少々含む、底面	ややあらわし	須前系須賀上器、外縁に施丁口印を施して、内側は模様分り、底面は模様分り	13世紀中期から 14世紀中期	
138	041レンチ	清	須前系須賀上器	瓶	口縁部	(14.0)	灰白色	砂粒少々含む、底面	ややあらわし	須前系須賀上器、外縁に施丁口印を施して、内側は模様分り、底面は模様分り	13世紀中期から 14世紀中期	
139	041レンチ	清	上加賀上器	皿	底部	5.2	に赤い褐色	砂粒含む	良	須前系須賀上器、外縁に施丁口印を施して、内側は模様分り、底面は模様分り	13世紀中期から 14世紀中期	
140	041レンチ	清	上加賀上器	皿	口縁部	(8.5)	に赤い褐色	砂粒含む	良	須前系須賀上器、外縁に施丁口印を施して、内側は模様分り、底面は模様分り	13世紀中期から 14世紀中期	
141	031レンチ	清	須前系須賀上器	鉢	口縁部		灰褐色	砂粒多く含む	良	須前系須賀上器、外縁に施丁口印を施して、内側は模様分り、底面は模様分り	13世紀中期から 14世紀中期	
142	041レンチ	清	須前系須賀上器	鉢	口縁部		灰褐色	砂粒含む	良	須前系須賀上器、外縁に施丁口印を施して、内側は模様分り、底面は模様分り	13世紀中期から 14世紀中期	
143	031レンチ	上板	國內系瓦質土器	釜	口縁部	(23.0)	灰白色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から 14世紀後半	
144	031レンチ	上板	瓦質土器	釜	觸部		灰白色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から 14世紀後半	
145	031レンチ	上板	古須前上加賀上器	瓶	底部	(4.0)	灰白色	砂粒含む	良	須前系須賀上器、外縁に施丁口印を施して、内側は模様分り、底面は模様分り	13世紀中期から 14世紀中期	
146	031レンチ	ビック4	上加賀上器	格子	口縁部	(10.9)	灰褐色	砂粒多く含む	良		マツメが濃い	
147	031レンチ	ビック4	瓦質土器	甕	触部		黄灰色	砂粒多く含む	良		マツメが濃い	
148	031レンチ	瓦列	須前系須賀上器	瓶	底部	(4.4)	灰褐色	砂粒含む	ややあらわし	須前系須賀上器、外縁に施丁口印を施して、内側は模様分り、底面は模様分り	13世紀中期から 14世紀中期	
149	041レンチ	瓦列	須前系須賀上器	甕	底部		灰白色	砂粒多く含む	良		13世紀中期から 14世紀中期	
150	041レンチ	瓦列	須前器	甕	口縁部	(11.2)	オリーブ灰褐色	砂粒多く含む	良	須前系須賀上器、外縁に施丁口印を施して、内側は模様分り、底面は模様分り	13世紀中期から 14世紀中期	
151	031レンチ	瓦列	青磁	甕	口縁部		綠灰色	微密	良		須前系須賀上器、13世紀中期	

番号	出土地所	種別	層位		法面(cm)			色調	施土	焼成	形態・調整手法の特徴	備考
					上位	底位	高さ					
152	10H-レシチ	茶褐色土	調査系灰質土層	鉢	口縁部	(28.4)		灰白色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から14世紀前半
153	10H-レシチ	茶褐色土	調査系灰質土層	鉢	口縁部	(26.0)		灰褐色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から14世紀前半
154	10H-レシチ	茶褐色土	調査系灰質土層	鍋	口縁部	(27.0)		灰白色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から14世紀前半
155	10H-レシチ	茶褐色土	灰質土層	鉢	口縁部	(26.0)		灰白色	砂粒含む	良	底部は肥厚し、外端はやや突出する	13世紀後半から14世紀前半
156	10H-レシチ	茶褐色土	古墳系灰質土層	鉢	口縁部	(11.8)		灰白色	砂粒少含む、施土	良	外端に斜押記入痕	13世紀後半から14世紀前半
157	10H-レシチ	茶褐色土	古墳系灰質土層	塊	底部	(7.0)		淡黄色	砂粒少量含む、施土	良	底面は薄い、側面は白形	
158	10H-レシチ	茶褐色土	古墳系灰質土層	塊	底部	(6.4)		灰白色	砂粒少量含む、施土	良	底面は白形、側面は白形でややハイライトがある	13世紀後半から14世紀前半
159	10H-レシチ	茶褐色土	古墳系灰質土層	塊	底部	(5.5)		浅黄褐色	砂粒少量含む、施土	良	古色は薄い、新面は白形	14世紀前半
160	10H-レシチ	茶褐色土	古墳系灰質土層	塊	底部	(5.4)		黄灰色	砂粒少量含む、施土	良	古色は薄い、新面は白形でハイライトがある。外端に斜押記入痕	14世紀前半
161	10H-レシチ	茶褐色土	古墳系灰質土層	塊	底部	4.3		浅黄褐色	砂粒少量含む	良	古色は薄い、新面は白形でハイライトがある。	マツダ式(11) 14世紀前半
162	10H-レシチ	茶褐色土	灰質土層	鉢	口縁部	(18.3)		灰白色	砂粒少量含む	良		
163	10H-レシチ	茶褐色土	土師質土層	皿	1/2	(7.5)	(6.8)	1.0	白色	砂粒少量含む、施土	直輪ヘラ切削	13世紀後半から14世紀前半
164	10H-レシチ	茶褐色土	土師質土層	皿	1/8	(8.0)	(6.4)	1.4	浅黄褐色	砂粒少量含む、施土	直輪	13世紀後半から14世紀前半
165	10H-レシチ	茶褐色土	土師質土層	皿	1/6	(7.5)	(5.5)	1.2	に、灰褐色	砂粒少量含む、施土	直輪	13世紀後半から14世紀前半
166	10H-レシチ	茶褐色土	土師質土層	皿	1/2	7.2	5.6	1.5	灰色	砂粒少量含む、施土	直輪	
167	10H-レシチ	茶褐色土	土師質土層	杯	3/5	(14.5)	(9.3)	3.3	浅黄褐色	砂粒少量含む、施土	直輪輪軸へ切り刃の木版式工具による成型	
168	10H-レシチ	茶褐色土	新石器系灰質土層	塊	口縁部-底部	(17.0)	(6.4)	(6.1)	乳白色	砂粒少量含む、施土ややあら	口縁部は新石器系灰質土層に多くなる。底面は白形で、側面が2段ある。	新石器系灰質土層
169	10H-レシチ	茶褐色土	新石器系灰質土層	塊	底部	5.8		灰白色	砂粒少量含む、施土ややあら	直輪	新石器系灰質土層	
170	10H-レシチ	茶褐色土	須恵器	甕	体部			灰白色	細密	可致	古期時代	
171	10H-レシチ	茶褐色土	須恵器	すり鉢	口縁部			褐灰色	砂粒多く含む	良	口縁部を削除し、内側や外側が2段ある。	須恵器半輪削り直輪
172	15H-レシチ	3周	調査系灰質土層	塊	底部	(5.0)		灰白色	砂粒含む	良	内輪はあらわし直輪	須恵器半輪削り直輪
173	15H-レシチ	4周	調査系灰質土層	鉢	口縁部			青灰色	砂粒多く含む	良	内輪はあらわし直輪。	須恵器半輪削り直輪
174	21H-レシチ	明治	須恵器	すり鉢	底部			灰褐色	砂粒含む	良	内面にあらわし直輪あり。	須恵器半輪削り直輪
175	B-13-レシチ	2号	青磁	甕	底部			オリーブ灰褐色	緻密	良	付属漆器	付属漆器
176	B-13-レシチ	2号	須恵器	甕	口縁部	(21.8)		灰褐色	砂粒含む	可致	内輪部外側へ2段のへ腹でめぐら	古期時代
177	15H-レシチ	3号	須恵器	甕	体部			灰褐色	砂粒含む	可致	外端に平行線を削る	古期時代
178	B-21-レシチ	2号	須恵器	甕	体部			灰白色	砂粒含む	良	外端に平行線を削る。	古期時代
179	B-13-レシチ	2号	須恵器	甕	体部			灰褐色	砂粒含む	可致	外端に落丁跡を削る	古期時代
180	F-3a1-レシチ	3号	調査系灰質土層	塊	口縁部	(36.0)		灰白色	砂粒多く含む	良	外端に斜押記入痕	13世紀後半から14世紀前半
181	F-3a1-レシチ	3号	調査系灰質土層	塊	口縁部			灰褐色	砂粒多く含む	良		13世紀後半から14世紀前半
182	F-2-2-レシチ	2号	調査系灰質土層	釜	口縁部	(28.0)		灰白色	砂粒多く含む	良	外端に斜押記入痕	13世紀後半から14世紀前半
183	F-3a1-レシチ	3号	土師質土層	鉢	口縁部	(23.0)		に、灰褐色	砂粒含む	良	外端に斜押記入痕、内面にハイライト	
184	F-3a1-レシチ	2号	青磁	甕	底部			灰オーブ色	緻密	良	裏面青磁	付属漆器
185	F-3b1-レシチ	2号	瓦質土層	甕	底部	12.0		唯オリーブ灰褐色	砂粒多く含む	良		マツダ式(11)
186	F-3b1-レシチ	2号	土師質土層	皿	底部	(8.4)		灰色	砂粒少量含む、施土	良		
187	F-3a1-レシチ	2号	須恵器	皿	口縁部	(9.8)		灰褐色	緻密	可致	裏面	
188	上の11	表鉢	須恵器	甕	体部			灰褐色	砂粒多く含む	良	外端に斜押記入痕、内面に同心円文	古期時代
189	F-13-レシチ	2号	須恵器	甕	口縁部	(15.0)		赤褐色	砂粒含む	可致	内輪部は三面をなす	須恵器半輪削り直輪

遺物観察表

番号	出土地所	種別	番種		法量(cm)			色調	胎土	焼成	形態・調整手法の特徴	備考	
					上径	底径	高さ						
190	F-13Hレンチ	2号	偏前後	直	口縁部			赤褐色	砂粒含む	良	外反して立ち上がり、開口は内側下方に開口して流れやすい丸く三脚状	隔壁面偏前直開口	
191	F-13Hレンチ	2号	偏前後	寸付け	口縁部			暗赤褐色	砂粒含む	堅致	山根付の足は、内側が開いてある。内側に細いスカリを付す。	隔壁面偏前寸	
192	F-10Hレンチ	3号	須恵質土器	鉢	底部	7.8		灰色	砂粒含む	良	外縁の内側が切欠き、内側にクロコ状	裏縁?	
193	C-2Hレンチ	2号	須恵器	甕	体部			灰白色	砂粒少含む	良	外縁に平行タテ目線	古神時代	
194	C-1aHレンチ	ピット4	土師質土器	灯明皿	完形	4.5	2.3	1.7	にれ、黄褐色	砂粒少含む	良	丁字ナタ調溝、内部に芯を置いたが止まる。	近世
195	C-1aHレンチ	ピット4	土師質土器	小鍋	完形	3.2	1.9	1.6	灰白色	緻密	無	内縁に二つの凹みがある。小さな目線を付す。	近世二つの凹みに内縁に横目線を付す
196	13Hレンチ	昭和	須恵器	杯蓋	一部			灰白色	砂粒少含む	良	縦平のつまみを付す	昭和は須恵器が最も多く見えていた	
197	01Hレンチ	3号	須恵器底質土器	甕	口縁部			暗赤褐色	砂粒少含む	堅致	外反した腹部を丸め込みをしており、内側にタテ目線がある。内側にハサカの跡がある。	隔壁面偏前直開口	
198	13Hレンチ	昭和	偏前後	甕	口縁部			灰色	砂粒少量含む	堅致	外反して立ち上がり、外縁に三脚状にわかる。内側にタテ目線がある。	隔壁面偏前直開口	

土製品観察表

番号	出土地所	種別	番種		法量				色調	胎土	焼成	備考	
					高さ(cm)	幅(cm)	底径(cm)	重さ(g)					
C1	Z2Hレンチ	3号	土製品	土瓶	ほぼ完形	5.0	1.5	0.5	6	にれ、黄褐色	砂粒少含む	良	外縁に指押された痕
C2	B-6Hレンチ	2号	土製品	土瓶	ほぼ完形	4.5	1.1	0.4	5	灰色	砂粒少含む	良	

金属器観察表

番号	出土場所	種別			法量(cm)				形態の特徴			単位(cm)
					直径	長さ						
M1	C-1aHレンチ	ピット2	鋼鉄	寛水通販	ほぼ完形	2.2						
M2	C-1aHレンチ	ピット2	鋼鉄	寛水通販	1/2	(2.2)						
M3	C-1aHレンチ	ピット2	鋼鉄	寛水通販	5/6	(2.2)						
M4	C-1aHレンチ	ピット2	鋼鉄	不明	ほぼ完形	2.4						
M5	C-1aHレンチ	ピット1	鉄製品	鉄釘	ほぼ完形		3.5					
M6	C-1aHレンチ	ピット2	鉄製品	鉄釘	ほぼ完形		3.5					
M7	C-1aHレンチ	ピット2	鉄製品	鉄釘	ほぼ完形		(3.5)					
M8	C-1aHレンチ	ピット2	鉄製品	鉄釘	ほぼ完形		(3.5)					
M9	C-1aHレンチ	ピット4	鉄製品	鉄釘	ほぼ完形		4.5					
M10	C-1aHレンチ	ピット4	鉄製品	鉄釘	ほぼ完形		(4.5)					
M11	C-1aHレンチ	ピット4	鉄製品	鉄釘	ほぼ完形		(4.0)					
M12	C-1aHレンチ	ピット4	鉄製品	鉄釘	ほぼ完形		5.0					
M13	C-1aHレンチ	ピット4	鉄製品	鉄釘	ほぼ完形		(4.5)					
M14	C-1aHレンチ	ピット4	鉄製品	鉄釘	ほぼ完形		5.0					

図 版

図版 1



1. 瓦窯 (SO-1) (西より)



2. 瓦窯 (SO-1) (北西より)

図版 2



2. SK-2 (東より)



3. SK-3 (東より)



1. SK-1 (東より)

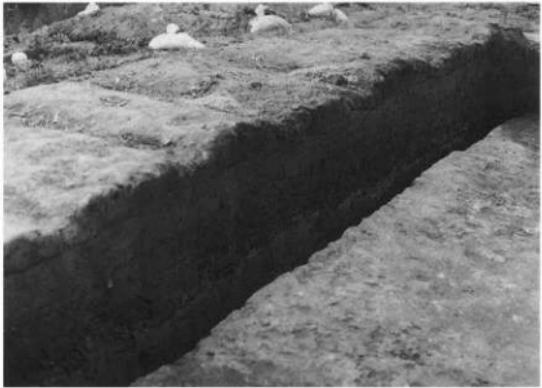
図版3



1. 瓦窯灰原（05トレンチ）
(南より)

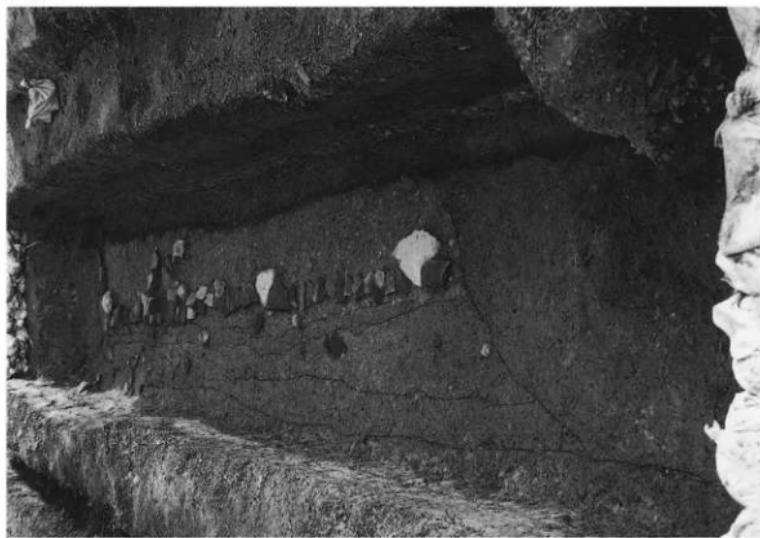


2. 瓦窯灰原（05トレンチ）
瓦出土状況（西より）



3. 05トレンチ
西面土層断面
(南東より)

図版 4

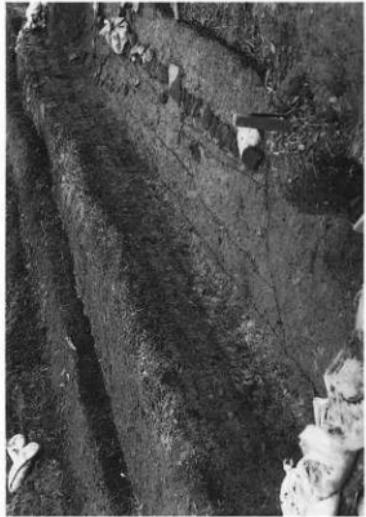


2. 磐石建物（北より）



1. 磐石建物（南より）

図版 5



2. 硫石建物検出トレンチ東面土層断面 (北西より)



4. 雨落ち溝断ち割り状況 (南より)



1. 硫石建物検出トレンチ西面土層断面 (北東より)

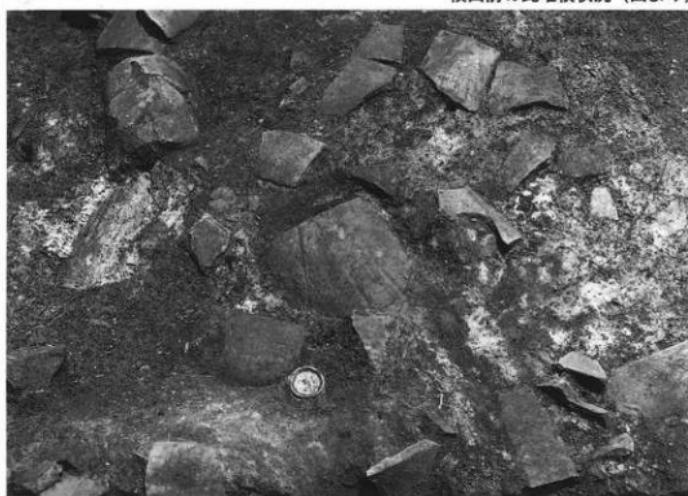


3. 硫石断ち割り状況 (東より)

図版 6



1. 排水施設（東より）



2. 排水施設（08トレンチ）
検出前の瓦堆積状況（西より）



1. 排水施設検出08トレンチ
北面土層断面
(南より)



2. 排水施設検出08トレンチ
西面土層断面
(東より)



3. 排水施設検出08トレンチ
南面土層断面
(北より)

図版 8



1. 07トレンチ瓦だまり
検出状況（北より）



2. 09トレンチ瓦だまり
検出状況（西より）

図版9



1. 土器窯 (SO-3)
(北西より)



2. 土器窯 (SO-3)
断面 (東より)

図版10



2. SD-1・素(SO-2) (北より)



1. 土器素(SO-4) (北より)

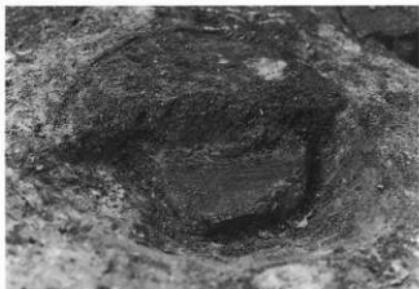
図版11



1. 03トレンチ溝・ピット群
検出状況（東より）



2. 03トレンチ土壤・ピット群
検出状況（北より）



3. 03トレンチピット3



4. 03トレンチピット4

図版12



1. 04トレンチ溝・ピット群
検出状況（南より）



2. 04トレンチ溝断面
A-A' (北より)



3. 04トレンチ溝断面
B-B' (東より)



2. 03 レンチ瓦列断面
B-B' (南より)



3. 03 レンチ瓦列断面
C-C' (北より)



1. 03 レンチ瓦列 (北より)

図版14



2. 04トレンチ瓦列断面
C-C' (南より)



3. 04トレンチ瓦列断面
D-D' (北より)



1. 04トレンチ瓦列 (南より)



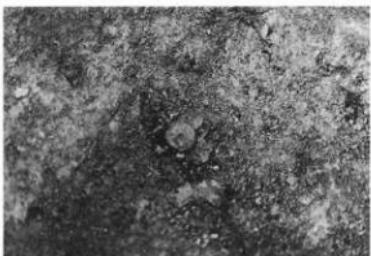
1. 15トレンチ検出状況（北より）



2. 10トレンチ検出状況（北より）



3. C-1aトレンチ検出状況（南より）



4. C-1aトレンチピット2 銭出土状況



6. F-2トレンチ瓦出土状況（北より）



5. C-4トレンチ検出状況（南より）



7. F-3bトレンチ瓦出土状況（南より）

図版16



1. 磁気探査風景



2. 電気探査風景



3. レーダー探査風景



4. 発掘調査風景（1）



5. 発掘調査風景（2）



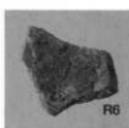
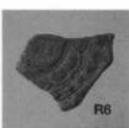
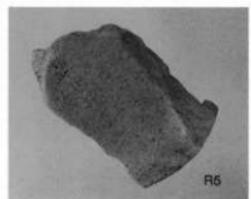
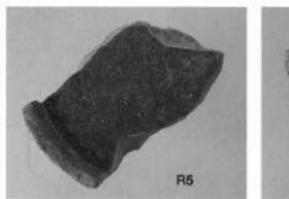
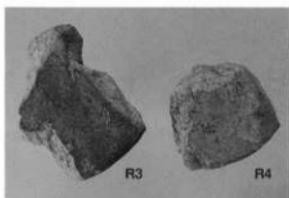
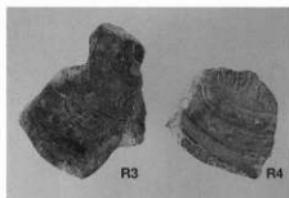
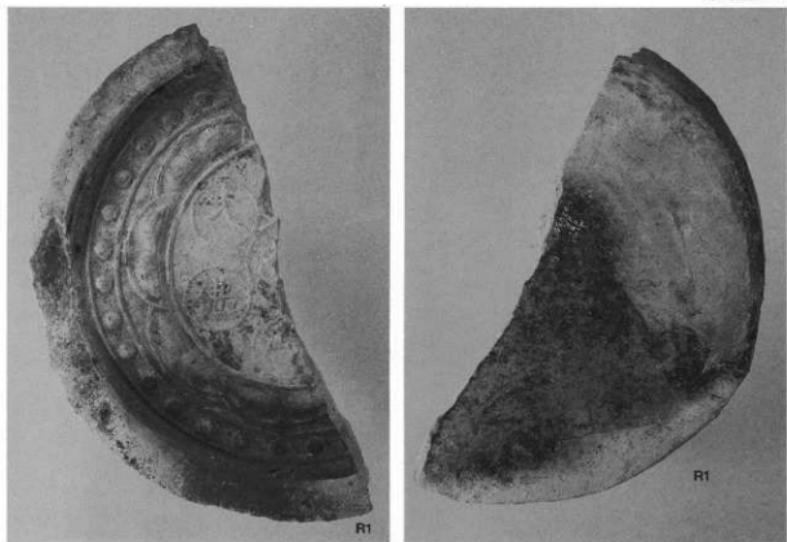
6. 現地指導風景



7. 現地説明会風景（1）



8. 現地説明会風景（2）

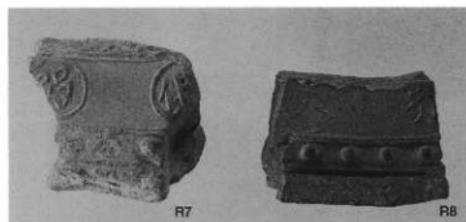


軒丸瓦

図版18

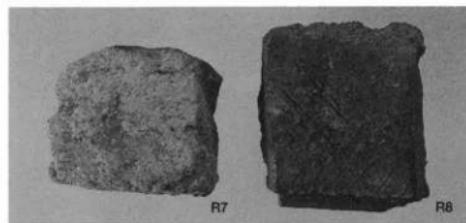


R9



R7

R8

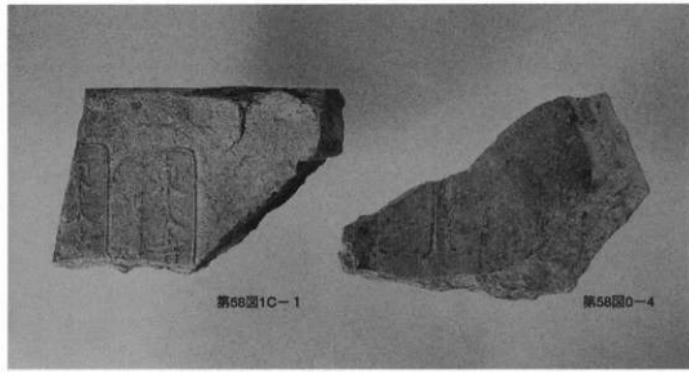
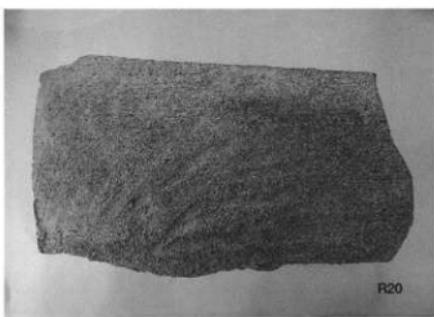
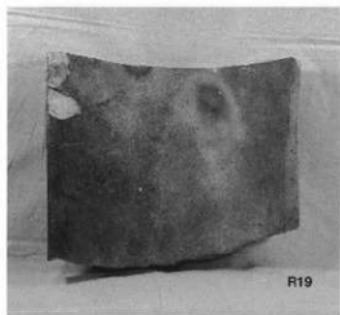


R7

R8

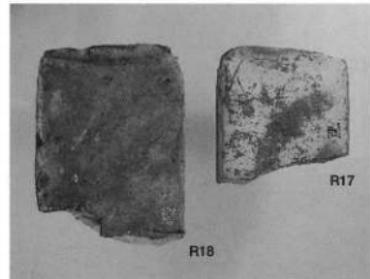
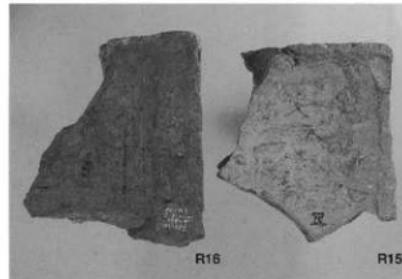
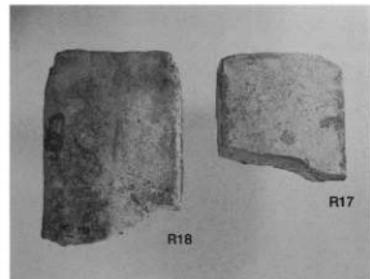
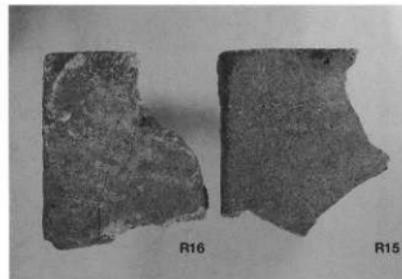
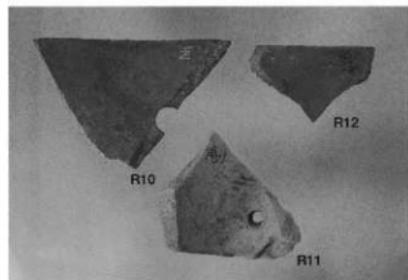
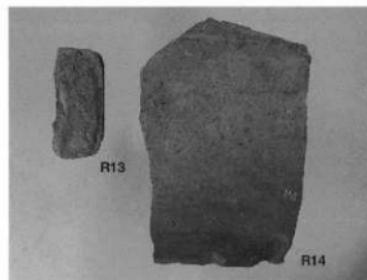
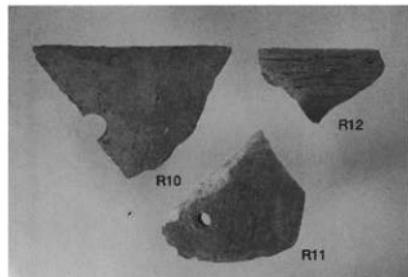
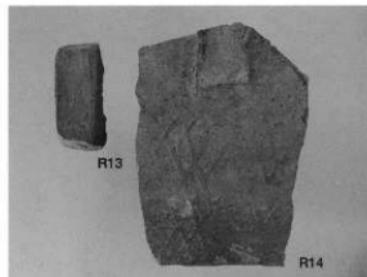
軒平瓦

図版19

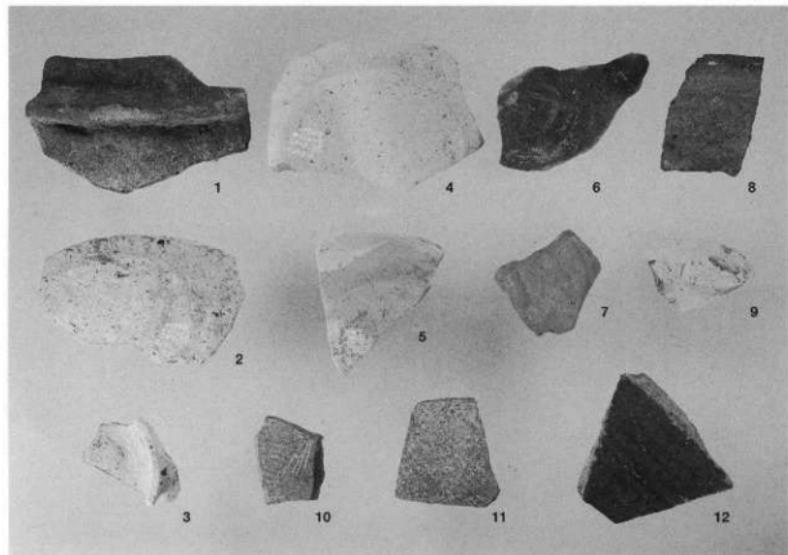


刻印瓦

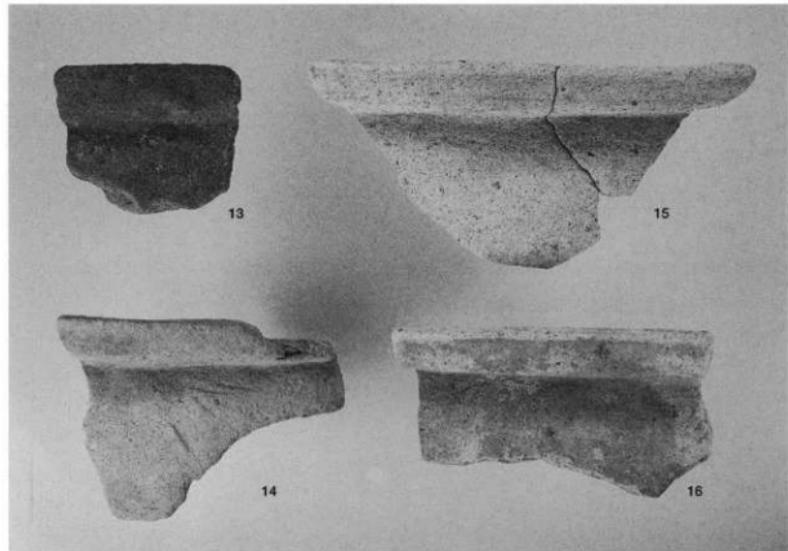
図版20



引掛け瓦・埴ほか

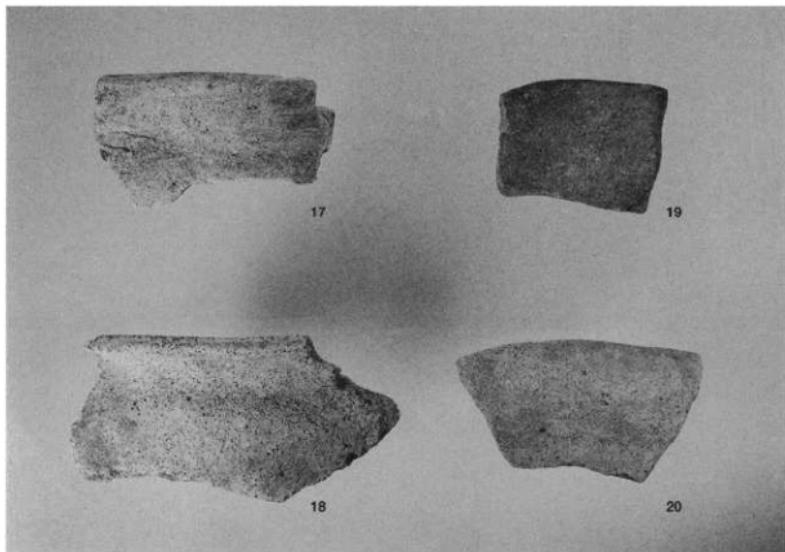


1. 瓦窯灰原（05トレンチ）出土遺物

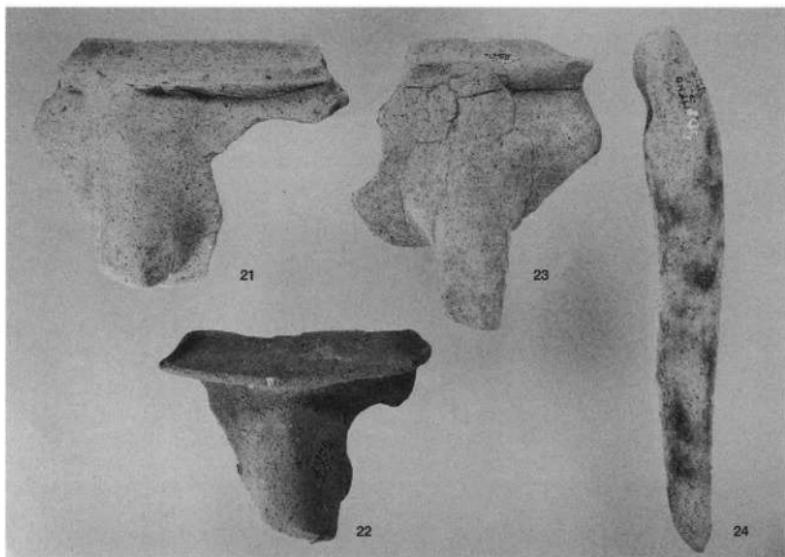


2. SD-1 出土遺物（1）

図版22



1. SD-1 出土遺物 (2)



2. SD-1 出土遺物 (3)